

よりわかりやすい旭川医科大学病院 臨床研修ガイドブック





伝えたいこと、集めました

よりわかりやすい旭川医科大学病院臨床研修ガイドブック発刊にあたって

令和8年6月

旭川医科大学病院卒後臨床研修センター長

牧野雄一

医学部で学ぶ皆さんにとって、初期臨床研修先の選択は、医師としての第一歩をどこで踏み出すかを決める大切な選択です。しかしながら、実際には「大学病院と市中病院の違いがよくわからない」「どちらで研修した方が成長できるのかわからない」「研修後にどのような医師になっているのか想像できない」と感じている方も少なくないのではないのでしょうか。

私たちは近年、研修医や医学生の皆さんとの意見交換を通じて、こうした率直な声を数多く伺ってきました。その中で強く感じたのは、大学病院での研修の実際や魅力が十分に伝わっていないということでした。

初期臨床研修の目的は、将来どの診療科に進むとしても必要となる基本的な診療能力を身につけることにあります。プライマリケア能力の修得、コモンディジーズの経験、患者さんや多職種とのコミュニケーション能力の向上、そして3年目以降に自立した診療を行うための基礎的技術の獲得は、すべての研修医に共通して求められる重要な目標です。

大学病院の最大の特徴は、幅広い診療領域と高度な専門性が一つの場所に集約されていることです。研修医は日常診療の中で一般的な疾患を経験しながら、同時に高度医療や最先端医療にも触れることができます。非常に多様な多職種連携も経験できます。これは大学病院ならではの大きな魅力です。

また、大学病院には各分野を代表する指導医が在籍しており、専門的な知識や技術だけでなく、診療に対する姿勢や考え方を学ぶことができます。さらに、教育活動、研究活動など多彩な経験を通じて視野を広げることができます。

本ガイドブックでは、当院の各診療科において、どのような研修が提供され、どのような経験ができ、どのような成長が期待できるのかを、できる限り具体的かつわかりやすく紹介しています。研修医の一日、経験できる手技、学べる疾患、指導体制など、皆さんが研修生活をイメージできる内容となるよう工夫しました。皆さんにはぜひ、「どの科を回るか」という視点だけではなく、「どのような医師になりたいか」という視点からも読み進めていただきたいと思います。

研修先選びに正解はありません。しかし、自ら考え、納得して選択した環境は、必ず皆さんの成長につながります。本書がそのための一助となり、将来のキャリアを切り拓くきっかけとなれば幸いです。

皆さんが医師として歩み始めるその第一歩を、私たちは全力で支援します。



目 次

診療科別卒後臨床研修プログラム

循環器内科	1
脳神経内科	3
腎臓内科	5
呼吸器内科	7
糖尿病・内分泌内科	9
リウマチ・膠原病内科	11
消化器内科	13
血液・腫瘍内科	15
肝胆膵・移植／消化管外科	17
血管外科	19
心臓外科	21
小児外科	23
呼吸器外科	25
乳腺外科	27
救急科	29
麻酔科蘇生科／ペインクリニック科	31
緩和ケア科	33
小児科・思春期科	35
産婦人科	37
精神科神経科	39
整形外科	41
皮膚科	43
腎泌尿器外科	45
眼科	47
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	49
放射線科	51
脳神経外科	53
臨床検査・輸血部	55
病理部	57
総合診療部	59
リハビリテーション科	61
診療科別マトリックス表	63

《 循環器内科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	内科全般の研修と同時に、生命に直結する循環器診療に携わるため、一刻を争う臨床現場での確な判断を下す能力を養う。 診断検査法としては、血液電解質・ガス分析、心電図、心エコー法、心臓カテーテル検査、治療手技・方法では、心肺蘇生、気道確保・挿管、中心静脈確保、カテーテル治療など救急対応に不可欠な手技。経験すべき病態・疾患としては、特に緊急を要するショックや急性心不全、高血圧、虚血性心疾患、心筋症、心臓弁膜症、不整脈などがあげられる。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	・医師としてのプロフェッショナリズムや資質を身につける。 ・経験すべき症候のうち循環器疾患に伴うショック、胸痛、心停止などについて、症例を通じて学ぶ ・経験すべき疾患としては、急性冠症候群に代表される虚血性心疾患、心筋症や弁膜症などの心不全、高血圧などに関して、診断法、治療法について学ぶ。 ・一般的な病棟業務、医療面接、身体診察、臨床推論について身につける。 ・手技に関しては、急変患者への対応として胸骨圧迫、除細動。心電図検査の施行及び読影、主にベッドサイドでの心エコー法、静脈ルートおよび動脈血採血の手法などを学ぶ。希望者においては、心カテーテルへの参加による手技の取得、中心静脈カテーテル留置などの実践も可能である。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	・残念ながら希望者が少ないため、手技経験をつみたい研修医の希望に応えられます。 ・大学の循環器研修をきっかけに循環器に興味を持ち、循環器専攻を選んだ 3 年目の後期研修医の先生からメッセージをいただきましたので、是非参考にしてください。 『大学での循環器内科研修がなければ、私が今カテーテルを握っていることはなかったでしょう。きっかけは大学同期に言われた「心臓が診られなければ医者ではないでしょう」という一言でした。何を専門にして医師としてのキャリアを築いていくか、ずっと迷っていた私にとって、頭を殴られたような衝撃でした。衝撃を受けた結果、1 年目の最初の 2 か月で循環器内科研修を取ろうと決めました。 医者 1 年目というだけでなく、社会人としても 1 年目の最初、右も左もわからない私の指針となったのは、ほかでもない、循環器内科の先生方でした。病棟業務はもちろんのこと、大学ならではの複雑な症例がひっきりなしに紹介されてくる中、1 人ひとりの患者さんに丁寧に問診を行い、身体診察をし、検査や治療の計画を組む。その合間に急性心筋梗塞や心停止の患者さんが突然やってきて、あっという間に緊急治療が行われる。そんな目まぐるしい毎日でも、先生方は、患者さんの退院後の生活にまで目を向け、多職種で相談してきめ細やかに方針を決めていらっしゃいました。ただ命を救うだけではなく、心臓が止まるその瞬間にまで思いを馳せて、治療に取り組む姿を見て、まさにこれが私の医師として目指すべき姿だと確信しました。そして、これが「心臓を診る」ということであり、「人を診る」ということなのだろうと実感しました。 間違いなく、この 2 か月があったから、私は循環器内科に進みました。心臓を診られなければ医者じゃない、は今考えると少し過激かもしれませんが、心臓を診ることを通して医師として大事なことを学べるのが旭川医大循環器内科の研修だと自信を持って言えます。これを読んでいるみなさんが私と同じような感動と学びを得られることを心から祈っています。』



《 脳神経内科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	・脳神経内科は、脳や脊髄、末梢神経、筋といった神経系疾患を対象とする領域である。診療を行う疾患は多岐にわたり、日常臨床で遭遇する機会が多い。そのため、専門科としての診療に加え、救急外来の診療や院内の他科からのコンサルテーションなど幅広い業務を担当している。そのため、脳神経内科を専攻する研修医だけでなく、他の診療科を専攻する研修医にとっても、将来役に立つ研修を行うことができると考えられる。 ・診療チームの一員として、主に入院患者の主治医として、医療面接、身体および神経学的診察、検査、治療、患者や家族への心理的・社会的支援について一貫して担当する。また外来患者や救急患者、院内の他科コンサルテーション患者の診療にもチームの一員として診療に取り組む。 ・神経疾患に関する知識、医療面接、神経診察、検査、治療についての基本的内容を習得することを研修の主な目的とする。 ・経験する主要な疾患や症例として、脳梗塞を中心とした脳卒中、アルツハイマー病などの認知症性疾患、パーキンソン病などの神経変性疾患、多発性硬化症や重症筋無力症などの神経免疫疾患、てんかん、頭痛などが挙げられる。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	・基本的な神経疾患に関する知識、神経診察、検査、治療について習得することを到達目標とする。また診療チームの一員として、他の医師や多職種の職員と協力をして、患者の診療に真摯に当たる姿勢を身につけることも重要な目標とする。 ・神経疾患に関する知識について、カンファレンスを通じて習得し、理解を深める。神経診察については、回診を見学することで知識や技術の習得を行い、実際に自身で診察を繰り返すことで、診察手技を精錬する。検査や治療について、指導医とともに自身でも行うことで、経験を積み、基本的な内容を研修期間中に習得する。 ・特に医療面接や神経診察は神経疾患以外の領域でも将来有用となるため、是非習得が望まれる。また腰椎穿刺は比較的行われることが多い検査手技であり、研修期間終了後も実施が必要となる機会に遭遇することが多く、研修期間中に習得することが望まれる検査手技である。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	・神経疾患は領域が広く、疾患の数が多いため、日常臨床で遭遇する機会の多い分野である。高齢化社会に伴い、脳卒中や認知症性疾患、パーキンソン病などの神経変性疾患が増加しており、将来的に社会的ニーズが高まることが考えられる。これらの疾患を有する患者は自宅や施設で療養していることも多く、訪問診療の分野においても背景となる基礎疾患として重要な位置を占める。 ・頭痛やてんかんは有病率が高い疾患も対象としており、コモンディジーズとして診療の知識や技術を習得することで、総合内科や家庭医療の場面でも役に立つ場面が多いと考えられる。 ・脳神経内科は北海道では専門医が少なく、初期研修で研修が難しい医療期間も多い。上述のように脳神経内科のみならず、他の診療科においても、初期研修での経験が将来役に立つ場面が多いと考えられる。特に内科専門医の取得するために必要となる経験すべき神経疾患の症例数は多いため、脳神経内科で初期研修を行うことは内科専門医を取得する上で有利と考えられる。 ・大学病院では、脳神経内科の入院患者のみならず、救急患者や他科からの紹介患者の診療に当たることも多く、幅広い症例を経験することができる。これらの患者の診療を通じ、脳神経内科を専攻する研修医はもちろん、他科の診療科を志望する研修医にとっても将来有用となる経験を積むことができると考えられる。

《 腎臓内科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	腎炎・ネフローゼ症候群・多発性嚢胞腎等の一次性腎疾患に加え、血管炎・自己免疫性疾患・血液疾患などによる二次性腎疾患の診断治療について経験する。 他科コンサルテーションとして頻度の多い急性腎障害、薬剤性腎障害、水電解質・酸塩基平衡異常のマネジメントについても学ぶ。また高血圧緊急症や二次性高血圧を含む高血圧性疾患全般の診断治療についても経験する。 習得すべき検査としては、尿検査・血液検査・血液ガス分析の結果解釈、各種画像検査（レントゲン、CT、MRI、超音波、核医学検査）、腎生検および病理診断、二次性高血圧における各種内分泌学的検査および負荷試験、さらに原発性アルドステロン症における副腎静脈サンプリングなどが挙げられる。 治療については、腎障害進行抑制を主眼とした慢性腎臓病治療の概要、腎炎・ネフローゼ症候群に使用されるステロイドや免疫抑制剤の投与方法や副作用管理、また高血圧緊急症を含む高血圧性疾患の管理方法について学ぶ。さらに慢性腎臓病における腎代替療法（血液透析・腹膜透析・腎移植）、急性腎障害に対する急性血液浄化療法や各種自己免疫性疾患等に対するアフエレシスなど、血液浄化療法全般についても経験する。 当大学病院腎臓内科の特徴として、他科からの急性腎障害や二次性腎疾患に関するコンサルテーションが多いこと、道北で唯一の腎移植実施施設であり、移植外科や腎泌尿器外科と連携しレシピエントおよびドナー術前精査や慢性期管理を担っていること、難治性ネフローゼなど治療困難例の紹介が多いこと、Fabry 病や C3 腎症をはじめとした希少疾患の経験数が豊富であること、またそれらに関する各種治験や臨床研究を行っていることが挙げられる。また、臨床で生じた疑問を解決すべく基礎研究も行っている。それらを通じて得られた知見を、積極的に国内外で学会発表しており、初期研修中に経験してもらうことも可能である。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	・腎病理所見および腎生理に基づく病態理解のもと、尿検査・血液検査・酸塩基平衡動態を解釈し、鑑別診断に必要な追加検査を提案できる。 ・一次性腎疾患の診断治療のみならず、二次性腎疾患についても、全身性疾患が腎臓に及ぼす影響を理解しつつ診断治療にあたることができる。 ・急性腎障害や、水電解質・酸塩基異常のマネジメントにつき理解実践する。 ・本態性高血圧の治療のみならず、治療抵抗性高血圧や二次性高血圧につき、診断および治療が理解できる。 ・腎生検や副腎静脈サンプリングなどの手技や結果解釈について理解する。 ・各腎代替療法の違いにつき十分に理解し、SDM（shared decision-making：共同意思決定）に基づいた療法選択を行えるよう、患者家族へ説明および支援できるようになる。 ・血液透析、腹膜透析、腎移植につき、実際の管理について理解できる。 ・抄読会や学習会を通じ、最新のガイドラインやエビデンスに基づく診断・治療を理解し遂行できる。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	「腎臓は全身を映す鏡」と言われています。一次性腎疾患も重要ですが、全身性疾患における腎合併症（二次性腎疾患）、薬剤性腎障害、または急性期病態における全身状態の変化を、尿所見や腎機能の推移から把握することは、腎臓内科のみならず全ての診療科において必要となります。 大学病院では、他院からの難治例の紹介や、他科からのコンサルテーションも多く、腎生理学や病理学はもとより、循環器病学、血液病学、免疫膠原病学、代謝内分泌学など、幅広い知識が求められますが、高度な専門性を有した大学病院の特性を生かし、各科と協力して診療にあたっています。腎代替療法においても、道北で唯一、三療法の実施が可能であり、特に血液透析においては重症例の管理経験が豊富です。

	当院腎臓内科研修においては、希少疾患を含めた各種腎疾患について理解を深めるとともに、「腎臓から全身を診る」深い洞察力が養われることが期待されます。また内科専門医研修に必要な多くの症例を経験することが可能です。さらに将来どの科に進んでも役立つ、急性腎障害・慢性腎臓病・透析管理の実際を、難治例・重症例を通して学ぶことが可能です。
--	---

《 呼吸器内科 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	【診療科名】呼吸器内科 旭川医科大学病院呼吸器内科は、北海道北部から道東にかけての広大な医療圏を支える基幹施設として、呼吸器疾患全般の診療を担っています。 肺癌、間質性肺炎、気管支喘息、COPD、肺感染症などの一般的な呼吸器疾患から、希少疾患や診断困難例まで幅広い症例を経験することができます。特に肺癌診療と間質性肺炎診療を診療の大きな柱としており、最新の薬物療法やゲノム医療、放射線科・病理部・膠原病内科などとの MDD（多職種・多診療科カンファレンス）を通じた高度な診断・治療を実践しています。気管支鏡検査にも力を入れており(年間 450 件前後)、診断から治療方針決定までの過程を間近で学ぶことができます。治験や臨床研究にも積極的に取り組んでおり、最新の医学知識だけでなく、新たなエビデンスが生み出される過程を学ぶことができます。総合内科専門医/内科専門医が合計 7 名、呼吸器専門医 5 名、気管支鏡専門医 4 名、アレルギー専門医、がん薬物療法専門医が在籍しており(2026 年度)、指導体制が整っています。感染制御部やがん遺伝子診療部などの病院部門とも深く連携しており、多彩な視点から見識を深める事ができます。 研修医は病棟診療、外来診療、救急対応、各種検査、カンファレンスに参加しながら、呼吸器内科診療の基礎から専門性の高い医療まで幅広く経験することができます。
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	呼吸器疾患診療に必要な知識・技術を習得するとともに、全身を診ることのできる臨床医として成長することを目標としています。 ・ 胸部 X 線・胸部 CT を中心とした画像診断能力の習得 ・ 肺癌、間質性肺炎、感染症など主要呼吸器疾患の診断・治療方針立案 ・ 呼吸不全や救急症例への初期対応能力の習得 ・ 気管支鏡検査、胸腔穿刺、胸腔ドレーン留置などの呼吸器診療手技の習得 ・ 患者さんの社会心理的状态に配慮したインフォームドコンセントのあり方の習得 ・ チーム医療および多職種連携の実践 ・ エビデンスに基づく診療および臨床研究への理解 上記を達成するため、上級医とともに 2-5 名程度の患者さんを担当して頂きます。
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	当科には北海道北部全域から患者さんが集まり、多彩で豊富な症例を経験することができます。大学病院としての高度専門医療と、地域の基幹病院としての幅広い臨床経験の両方を得られることは、当科ならではの特徴です。 さらに、若手医師が主体的に診療へ参加できる文化が根付いており、指導医との距離も近いと評価されています。特に病棟診療は伝統的に若手スタッフが中心となって運営しており、初期研修医にとって相談のしやすい環境です。 学会発表や臨床研究への参加機会も豊富であり、道内学会、全国学会へも医学生・初期研修医の演題発表の実績が多数あります。 呼吸器内科を志望している方はもちろん、「臨床力を身につけたい」「専門性の高い医療に触れたい」「研究にも挑戦してみたい」という方にも最適な研修環境です。2 か月程度の研修で、内科 J-Osler に必要な呼吸器領域の主要症例を幅広く経験することが可能で、病歴要約に適した典型的な症例を受け持つ事ができます。

気管支鏡、胸腔穿刺、胸腔ドレーン留置、末梢型中心静脈カテーテル留置、動脈穿刺、非侵襲的人工呼吸の導入などの手技を経験頂く事も重視しております。事前に一定の手技への理解度を確認した上で、指導医付き添いのもと研修医が手技を完遂できる事を目標に研鑽を積んで頂いております。

間質性肺炎外来では年間 100 人前後の新患患者を受け入れています。初診時の問診を担当頂き、鑑別疾患に必要な多角的な問診を身に着けることが出来ます。

希望に応じて専門医同席でのフォローのもと、担当患者さんへのインフォームドコンセントを実施頂いております。呼吸器疾患は生命に直結する疾患が多く、厳しい説明が必要になる事も少なくありません。十分な病状説明をするには、十分な疾患の理解が必要になります。後期研修医となった際に患者さんへの説明に苦労したという声も多く、当科では初期研修医のうちに患者さんの心理的側面や社会的背景に寄り添ったインフォームドコンセントの研修を行って頂ける事を特色と考えています。

研修開始時には、担当指導医が皆さんの目標や興味を伺い、一人ひとりに合わせた研修内容を提案します。呼吸器内科志望の方はもちろん、将来の進路を迷っている方や内科診療能力を高めたい方も大歓迎です。

スタッフ一同、皆さんと一緒に診療できる日を楽しみにしています。



《 糖尿病・内分泌内科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	糖尿病・内分泌内科は、糖尿病をはじめとする代謝疾患、甲状腺疾患、下垂体疾患、副腎疾患、骨・カルシウム代謝異常など、全身の恒常性維持に関わる幅広い疾患を診療する診療科です。当科では、外来・病棟診療を通じて、Common Disease から高度専門医療を要する希少疾患まで多彩な症例を経験することができます。研修では、指導医のもとで病歴聴取、身体診察、検査計画の立案、治療方針の検討などに参加し、段階的に診療能力を身につけます。また、多職種カンファレンスや症例検討会を通じて、チーム医療の実践も学びます。主な経験疾患として、1型・2型糖尿病、糖尿病急性合併症、甲状腺機能異常症、下垂体・副腎疾患、原発性アルドステロン症、副甲状腺疾患、骨粗鬆症、電解質異常などが挙げられます。大学病院ならではの専門的検査や負荷試験、希少疾患の診療を経験できることも特徴です。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	本研修の目標は、糖尿病・内分泌疾患を有する患者に対し、病態を的確に把握し、適切な診断・治療方針を立案できる基礎的な臨床能力を身につけることです。糖尿病診療では、血糖値や各種検査データの評価を通じて病態を理解し、食事療法・運動療法・薬物療法を含めた包括的な治療戦略を学びます。また、インスリン療法やCGM（持続血糖測定）、糖尿病ケトアシドーシスなどの急性代謝失調への対応を経験し、多職種と連携した糖尿病診療の実際について理解を深めます。内分泌診療では、甲状腺、下垂体、副腎、副甲状腺などの疾患に対する診断アプローチを学びます。ホルモン検査や各種負荷試験、画像検査を組み合わせながら診断に至る過程を経験し、病態生理に基づいて論理的に考える力を養います。さらに、病歴聴取や身体診察を通じて臨床推論能力を身につけるとともに、カンファレンスや症例検討会を通じてプレゼンテーション能力や患者中心の医療を実践する姿勢を学びます。本研修を通じて、糖尿病・内分泌領域の知識や診療技術だけでなく、全身管理能力、臨床推論能力、コミュニケーション能力など、将来どの診療科に進む場合にも役立つ内科医としての基礎力を習得することを目指します。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	糖尿病・内分泌内科の魅力は、「全身を診る力」と「病態を考える力」を身につけられることです。糖尿病や内分泌疾患は、あらゆる診療科と関わる疾患であり、その診療を通じて全身管理の基礎を学ぶことができます。そのため、将来どの診療科へ進む場合であっても、ここで培った知識や経験は大きな財産となります。また、内分泌診療は、患者さんの症状や身体所見、検査データから病態を論理的に組み立てて診断へとたどり着く、内科診療の醍醐味を味わえる分野です。一方で糖尿病診療では、急性期管理から慢性期フォローアップまで幅広い診療を経験し、患者さんの生活背景や価値観にも寄り添いながら長期的な治療支援を行います。疾患だけではなく、「患者さんそのもの」を診る姿勢を学べることも大きな魅力です。旭川医科大学病院は、道北地域の基幹病院として多くの患者さんを受け入れており、日常診療で遭遇する Common Disease から高度な専門性を要する希少疾患まで、幅広い症例を経験することができます。さらに大学病院ならではの専門的検査や最新の診断・治療に触れる機会も豊富であり、臨床医学の奥深さを実感できる環境が整っています。当科では、単に知識や手技を習得するだけでなく、「なぜこの病態が起こるのか」「患者さんにとって最善の医療とは何か」を考える姿勢を大切にしています。病態生理に興味がある方、全身を診る内科医を目指したい方、患者さんと長く関わる医療に魅力を感じる方には、きっと多くの学びと発見があるはずです。ぜひ私たちとともに、内科診療の面白さと奥深さを体感してください。



《 リウマチ・膠原病内科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	内科全般の研修と同時に、全身性疾患である膠原病の診療に携わる能力を養う。 診断検査法としては、関節診察、X線検査、骨塩定量、骨代謝評価、関節超音波検査、CT、MRI、核医学検査、骨髓穿刺／生検、腎生検などの施行、解析・評価法について研修する。 経験する主要な疾患：関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、全身性強皮症（全身性硬化症）、皮膚筋炎・多発性筋炎、結節性多発動脈炎、ANCA 関連血管炎、シェーグレン病（症候群）、混合性結合組織病、成人発症スチル病、RS3PE 症候群、リウマチ性多発筋痛症、IgG4 関連疾患など。 上記の膠原病およびその類縁疾患、アレルギー性疾患を幅広く経験し、多くの鑑別疾患の特徴についても把握できるようになる。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、全身性強皮症（全身性硬化症）、皮膚筋炎・多発性筋炎、ANCA 関連血管炎などの主要な膠原病・膠原病類縁疾患の診療ができるようになる。具体的には以下の項目を習得する。 1. 膠原病・膠原病類縁疾患が診断できる。 2. 膠原病・膠原病類縁疾患の合併症を的確に評価し、診断できる。 3. 膠原病・膠原病類縁疾患の治療方針を決定できる。 上記の到達目標において、以下の各基本的項目を習得する。 1) 症例の病歴を正確に聴取し、カルテに記載できる。 2) 理学所見を把握し、正確にカルテに記載できる。 3) 必要な血液検査、尿検査を実施し、結果を正しく理解できる。 4) 必要な CT、MRI などの画像検査を実施し、結果を正しく理解できる。 5) 関節の圧痛・腫脹を正確に評価することができる。 6) 関節超音波検査を実施できる。 7) 発熱性疾患の鑑別ができる。 8) 治療方針決定に際しては、各種疾患のガイドラインや治療推奨に沿った治療方針の決定のみならず、個々の症例の合併症などの状況に応じた治療方針の決定について学び、実践できるようになる。 9) 治療薬の作用、および重要な副作用や留意点について理解できる。 10) カンファレンスで症例について過不足なくプレゼンテーションできる。 11) 臨床実習学生に対して、カンファレンスでのプレゼンテーションを指導できる。 12) 上級医による患者や家族への病状や治療についての説明時に同席し内容を理解できる。 13) 上級医の同席のもと、患者や家族へ病状や治療についての説明ができる。 14) 退院時に必要な処方や指示を行い、退院時要約を記載できる。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	膠原病・膠原病類縁疾患などの自己免疫疾患の発症機序や病態の解明が進んでいます。従来広く用いられてきたグルココルチコイド（＝ステロイド）のように、非特異的に免疫を抑制する治療法に頼らない、より病態に即した生物学的製剤や JAK 阻害薬などの新規治療法が次々と開発され、臨床応用されてきています。患者に応じた治療＝Precision medicine も現実のものになりつつあります。このような医学の日進月歩を体感することは、医学研究や新薬開発などに参加するモチベーションを高める機会をも提供するといえましょう。

膠原病・膠原病類縁疾患には、稀少疾患も含まれており、市中病院などでは遭遇する機会が少ない可能性があります。大学病院には、難治性の膠原病・膠原病類縁疾患あるいは稀少疾患が集積され、地域の自己免疫・慢性炎症性疾患診療の最後の砦としての機能を発揮しています。また、多数の複雑な疾患や病態を併せ持つ症例も多く、膠原病診療は、患者を広く捉える能力に直結し、総合的な診療能力にも直結すると考えられます。

最先端医学と同時に、プライマリケアとコモンディジーズをたっぷり経験できる——リウマチ・膠原病内科研修は、全ての研修医にとって臨床研修の本質と醍醐味を味わえる良い機会になるでしょう。



《 消化器内科 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	● 診療科の特徴: 内科全般にわたる研修として、適切な医療面接や内科的診察法、疾患の病態に基づいた治療薬剤の正しい選択・投与法などの基本的な知識と技術を習得します。さらに中心静脈栄養や経腸栄養、全身管理の基本を学び、消化器腫瘍や炎症性疾患の診断・治療、その合併症への対応といった専門的診療技術をバランスよく習得します。 ● 基本研修体制: 19名の指導医のもと、各グループの一員として診療に深く関わります。当科には「消化管」「肝臓」「胆膵」の各専門グループが揃っており、それぞれの分野で偏りのない包括的な研修体制を整えています。 ● 経験する主要な疾患・症例: 食道炎、食道癌、食道静脈瘤、胃炎、胃十二指腸潰瘍、胃癌、機能性胃腸症、大腸炎、過敏性腸症候群、大腸癌、炎症性腸疾患（IBD）、膵炎、膵癌、胆嚢炎、胆道腫瘍、肝炎、脂肪肝、肝硬変、食道胃静脈瘤、肝癌など、日常的な common disease から専門疾患まで幅広く経験が可能です。
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的な研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	日本消化器病学会の専攻医研修ガイドに連動し、将来の専門医取得を見据えた以下の具体的な到達目標を設定しています。 ● 専門知識と臨床推論（EBMの基礎）: 適切な医療面接と身体診察から病態を的確に把握し、科学的根拠（EBM）に基づいた診断過程と治療計画の立案ができるようになること。胸部・腹部単純X線、CT、MRI、上・下部消化管X線などの各種画像診断を正確に読影・解釈する力を養います。 ● 専門技能の獲得: 指導医の適切な指導のもと、腹部超音波検査や内視鏡検査の基本操作を安全に実践し、検査所見を正しく解釈できるようになること。さらに、早期癌に対する粘膜切除術や粘膜下層剥離術（ESD）、膵・胆道疾患に対する乳頭切開術・排石術、膵管・胆管生検、肝疾患に対する肝生検、内視鏡治療、血管造影などの最前線の専門技術に間近で触れ、自立した専門医としての基礎を築きます。 ● プロフェッショナリズムとチーム医療: 各グループの一員として多職種と連携しながら、患者さんやご家族と良好なコミュニケーションをとり、全人的なアプローチができるスキルの習得と、診療に対する姿勢を養います。
研 修 の 魅 力 ・ メ ッ セ ー ジ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	「消化管」「肝臓」「胆膵」と、消化器内科の全領域を体系的にハイレベルに学べる環境です。 大学病院での研修に対して「特殊な病気ばかりで、一般的な病気が診られないのでは？」という不安を持つ人がいるかもしれません。確かに、純粋な common disease の症例数そのものは市中病院のほうが多いかもしれませんが、そもそも common disease を診断するには希少疾患も含めた様々な疾患を熟知し、正しく鑑別する必要があります。当科では救急外来を通して受診される一般的な消化器疾患の患者さんも多数おられ、日常的な初期対応から専門性の高い高度な病態まで、幅広く経験できることに加え、希少疾患を含む多様な疾患・病態を学ぶ事ができます。さらに、病診・病病連携を通じて、地域に根ざしたプライマリ・ケアのスキルもしっかりと身につけることができます。 その上で、先進的な内視鏡治療や炎症性腸疾患（IBD）に対する最新の分子標的治療、肝癌に対する集学的治療など、各グループが誇る最先端の専門医療を間近で体感できるのが最大のメリットです。日常診療の基本から高度な専門医療まで、どちらかに偏ることなくバランスよく学べるのが旭川医大・消化器内科の強みです。

また、当科では臨床研究や学会発表も非常に精力的に行っています。アカデミア活動を通じて、国内の学術集会はもちろん、海外の国際学会に参加して最先端の知見に触れるチャンスもあります。初期研修の段階から将来の消化器病専門医へのシームレスなキャリアパスを意識した指導を行っており、学会発表や論文作成へのチャレンジも医局全体で全力でバックアップします。

19名の経験豊富な指導医陣が、温かく、かつ熱意を持って一人ひとりの研修をサポートします。消化器のプロフェッショナルとして、また信頼される内科医としてのキャリア形成を、ぜひ私たちと一緒に踏み出しましょう！皆様の参加を心よりお待ちしております。



《 血液・腫瘍内科 》

研修の概要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	血液・腫瘍内科は白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍をはじめとして、造血器に関わる様々な疾患の診断と治療に携わっています。初期研修では入院症例のマネジメントを中心に関わってもらい、造血器疾患の診断に必要な検査、化学療法計画と副作用対策、免疫不患者の感染症、輸血療法について、基本となる内容の習得を目標としています。また、近年発展が著しい免疫細胞療法の領域において、造血幹細胞移植、CAR-T 細胞療法、二重特異性抗体を用いた症例を経験し、その概念と治療効果判定、合併症について症例を通して理解を深めてもらいたいと考えています。また、血液疾患は様々な臓器に異常をきたす可能性があり、内科医として全身管理を行うトレーニングを積むことができます。研修中は常に指導医がついているため相談しやすい環境にあります。日々の診療録の記載やカンファレンスでの症例提示を通して、自らのプレゼンテーション能力を高めるための指導にも力を入れています。
研修目標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的な研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	- 白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの主な造血器腫瘍の診断および治療について理解する。 - 化学療法中の副作用および合併症管理について理解し、実践できる。 - 免疫細胞療法について、治療の内容と特有の合併症について理解する。 - 免疫不全患者における感染症について理解し、必要な検査や治療を実施できる。 - 輸血療法の適応と副反応について理解し、輸血療法を実施できる。 - 血液がん治療における疼痛緩和、終末期医療について理解し、実践できる。 - 造血器疾患の診断や治療に必要な手技（骨髄穿刺、骨髄生検、髄液検査、中心静脈カテーテル挿入、胸腔穿刺、腹腔穿刺、末梢血幹細胞採取など）を経験する。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	血液内科では血液疾患の診断から治療まで、全てのプロセスに関わることができます。そのため、適切な診断と治療により、患者さんの復帰を目にすることができ、大きなやりがいを感じられます。造血器疾患は様々な臓器に異常をきたすことが多いため、内科医としての総合力を養うことができます。大学病院は難しい症例が多いですが、その分診断や治療法について深く考察し、臨床医としての思考力を鍛える機会に恵まれています。また、最新の治療や研究に携わる機会にも恵まれていることも大学病院研修の魅力と言えます。旭川医科大学血液内科で一緒に働きましょう！



《 肝胆脾・移植／消化管外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	本診療科における研修は、一般外科研修として位置付けられる。一般外科とは、最も頻度の高い消化器ないしは腹部疾患を主な対象とする外科を指す。 研修内容の主要骨子は以下の点である。 1. 手術患者を通し、術前・術中・術後の全身管理を集中的に学ぶ。 2. 基本的外科手技の習得：定期手術の他、配属された臓器別診療科（消化管外科／肝胆脾・移植外科）に限らず緊急手術へ参加。 3. 外科総論ミニレクチャー：1 年を通しプログラムとして行う。（例）輸液、栄養、手術器具、外科救急、処置など 4. 学会、研究会への参加：希望者には、将来の進路等を考慮したうえで地域・道内・全国学会の学術活動への参加や発表も。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1. 外科疾患に対する基本的な知識と診断・治療能力を身につける。特に腹部救急疾患については手術適応、周術期管理も含め診断能力を身につける。 2. 外科治療患者の診察・診療時に全人的に接遇することができる。 3. 基本的検査・治療手技および外科基本手術手技（消毒、皮膚切開、縫合、結紮、開腹、小手術、抜糸・抜鉤、ドレーン、カテーテルの固定・抜去など）を実施できる。 4. 疾患に応じた術前・術中および術後管理の基本的原則を習得する。 ① 正確に病歴、現症をとらえカルテに記載できる。 ② 的確なプレゼンテーションや、退院時サマリーの記載ができる。 ③ 術前の基本的検査（血液生化学検査、心電図、呼吸機能、動脈血ガス分析、血液凝固機能検査、胸部・腹部 X 線写真）を実施し解釈ができる。 ④ 消化管造影、超音波検査、CT、MRI などの画像診断の適応を決定し読影ができる。 ⑤ 中心静脈カテーテルを含めた輸液ルートを確保できる。 ⑥ 薬剤や血液製剤の投与量を計画し処方、指示ができる。 ⑦ 手術内容に応じた術前処置、周術期輸液管理を計画し、実施できる。 ⑧ 術後の人工呼吸器による呼吸管理、気管支鏡による喀痰吸引、循環管理計画ができる。 ⑨ 外科におけるドレーン管理について理解する。 ⑩ 外科栄養管理について理解する。 ⑪ DIC、MOF の診断、治療計画ができる。 ⑫ 腫瘍外科の手術術式、抗がん剤を含む術前・術後管理を経験し、理解できる。 ⑬ 臓器移植の手術術式、免疫抑制療法を含む術前・術後管理を経験し、理解できる。 ⑭ 血液浄化法や、体外循環を理解し、重症術後管理の一貫として理解する。 ⑮ 術後の病理学的検査のための処置ができ、結果を理解、説明できる。 ⑯ 上級医の患者や家族への説明時に同席し内容を理解できる。 5. 救命、救急に対処し、心肺蘇生や、急性腹症、出血などに対する迅速・的確な処置の基本的原則を身につける。また、悪性腫瘍患者に対する集学的治療に必要な基本的知識、技術を理解する。 6. 癌末期患者に対する人間的、心理的理解の上にたった緩和治療を理解し、身につける。 7. チーム医療の一員として求められる資質を養う。 8. 医の倫理に配慮した外科診療上の資質を身につけ、インフォームド・コンセントに関する理解を深める。 ※ 上記に加え、2 年目の選択研修においては、外科に関連するより高度な手術手技、術前・術後管理や検査手技に関する研修を行う。

研修の魅力・
メッセージ

- ・診療科の魅力
- ・診療科から見た
大学病院研修の
魅力やメリット
等

外科は手術を主な治療手段とする診療科ですが、その中でも消化器外科は対象とする臓器、疾患が幅広く、消化器系の悪性腫瘍の他、炎症、外傷、先天異常なども扱います。一般外科、総合外科または単に外科といえば、ほぼ消化器外科を指します。

そして手術を安全かつ効果的に行うためには正確な診断と繊細な周術期管理が不可欠です。したがって、手術後の患者さんの回復から得られる達成感に加えて、臨床医として多くの場面で役に立つ幅広い知識と手技を習得できることも外科の魅力です。

その反面一人前になるまでの修練期間が長いといわれており、また上記研修目標にもある通り、外科医の業務は多岐に渡り、一般外科研修では学ぶべきことが多く、さらに長時間手術や緊急手術もあり忙しいのは事実です。しかし外科では従来からチーム制をとっており、現在の働き方改革に対応しているばかりでなく、各スタッフの事情にも柔軟に対応しています。

大学病院では全ての手術症例について術前検討会で十分なディスカッションをしており、診療の根拠や考え方をしっかり学んでいただけます。全ての診療科が揃っているためあらゆる併存疾患に対応できることも大きな強みです。



《 血管外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	・血管外科では、下肢閉塞性動脈疾患、包括的高度慢性下肢虚血、急性下肢虚血、深部静脈血栓症、腹部大動脈瘤、内臓・末梢動脈疾患、透析シャント関連疾患、下肢静脈瘤などを診療します。 ・研修医は、病棟、外来、救急、手術室で診療に参加し、血管診察、検査所見の読み方、周術期管理、創傷管理、抗血栓療法の考え方を学びます。 ・「足が痛い」「足が冷たい」「創が治らない」「下肢が腫れた」など、初期研修医が日常診療で出会う症候から、緊急性の判断と専門診療へのつなぎ方を経験できます。 ・糖尿病、腎不全、透析、冠動脈疾患、脳血管疾患を併存する患者さんが多く、血管だけでなく全身を診る姿勢を身につけます。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	・研修終了時には、血管疾患を疑うべき症候を理解し、診察と初期評価を自分で組み立てられることを目標とします。 ・具体的には、脈拍触知、ドプラ血流評価、ABI・SPP・超音波・CTの基本的な見方、急性下肢虚血や深部静脈血栓症の初期対応、創傷・感染・疼痛・栄養・血糖・透析を含めた周術期管理を学びます。 ・手術では、開創、結紮、縫合、血管吻合の基本を段階的に経験し、血管内治療やハイブリッド治療の考え方も学びます。 ・将来どの診療科に進んでも、血管疾患を見逃さず、適切に相談・紹介できる力を養うことを重視します。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	・血管外科の魅力は、診断、全身管理、手術、血管内治療、創傷治療、リハビリテーションを一連の流れとして経験できる点です。患者さんの歩行や創傷治癒に直結するため、治療の効果を実感しやすい診療科です。 ・大学病院では、重症虚血肢、大動脈疾患、透析患者さんの血管アクセスなど、複雑な病態を多職種で診る経験が得られます。一方で、下肢痛、下肢腫脹、創傷、動脈硬化など、初期研修で重要な症候・疾患も多く経験します。 ・血管外科を志望する方だけでなく、救急、総合診療、内科、外科、整形外科、皮膚科、形成外科を考えている方にも役立つ研修です。血管疾患を正しく疑い、全身を見ながら治療方針を考える力を身につけたい方を歓迎します。



《 心臓外科 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	心臓外科研修指導責任者（紙谷寛之）および、5名の研修指導者（伊勢隼人、國岡信吾、潮田亮平、宮本寛之、柴垣圭佑）の計6名の心臓血管外科専門医の指導、責任のもとで研修が行われる。研修医は診療チーム（指導者の他外科学講座医員で構成）の一員として全患者を担当し診療を実践する。 心臓血管外科志望者はもちろん、他の外科志望者にとっても外科専門医修得に必要な心臓大血管症例を経験できる。また、術中、術後管理を担当し、循環血行動態の理解を深めることができる。最低でも3カ月以上の研修が望ましいが、志望する科や個人の事情により特定分野を短期間に重点的に担当することも可能である。（循環器内科志望者のペースメーカー手技、等）
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	先天性及び後天性心疾患、胸部大血管疾患に対する外科的、保存的治療の他、心停止例に対する PCPS など人工心肺を用いた救急救命処置や手術を経験する。 ① 基本的臨床スキルの修得 症例を通じて、カルテ記載、カンファレンスや他科へのプレゼンテーション、必要な指示オーダー(検査、内服、注射など)を行うことができる。 ② 循環血行動態の理解 手術適応、術式の詳細を把握・理解し手術に臨み、術後の循環呼吸管理まで担当することで病態ならびに血行動態の変化を理解することができる。 ③ 外科基本手技、集中治療管理のスキルの修得 手術・術後管理を通じて、皮膚切開や縫合、結紮をできるようになる。また、呼吸器操作や循環作動薬の調整、気管支鏡、中心静脈カテーテル、ドレーン挿入を行うことができる。 ④ 学術活動への挑戦 担当症例をまとめ学会で発表し、論文として投稿する。 ⑤ チーム医療の実践 患者さんの信頼を得て、診療を遺漏なく行うための知識と技量を修得すると同時に、多くのコメディカルに支えられるチーム医療の中心的役割を担うための態度を身につける。
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	心臓外科は忙しくて帰れない、朝早くて夜遅い、それは過去の話である。今は、働き方改革により労働環境の改善が進み、“ホワイトな診療科”としてメリハリのある研修が可能である。しかしながら、心臓外科は“心臓大血管”という命に直結する臓器を扱うため、緊迫した場面に遭遇することも多くそれが当科の魅力である。一刻を争う病態に対し、手術によって患者救命につながる症例を数多く実感できる。特に大学病院には大動脈解離を始めとする大血管疾患、虚血、弁膜症、重症心不全といったあらゆる循環器疾患を経験できる。一方で、命を繋ぐためには手術だけでなく、集中治療管理が重要であり、循環呼吸管理のエキスパートである心臓外科では、それを学び修得することができる。人工呼吸管理から循環作動薬の調整、気管支鏡、ドレーン挿入まで研修医のうちに身につけておきたい基本手技、知識を網羅することができる。確かに他科と比較し多少忙しいことは否めない。それでも得られるものは大きく、心臓血管外科に興味を持つ研修医にとって、有意義な研修機会を提供したいと考えている。



《 小児外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	✓ 小児外科認定施設は<u>北海道に3カ所しか無く</u>、札幌に2カ所（北大、コドモックル）、<u>旭川に1カ所（当院）のみ</u>です。 ✓ 小児外科では、新生児から思春期まで幅広い年齢層の患者を担当し、「全身を診る力」を身につけることができます。小児特有の生理や病態を学ぶことで、将来どの診療科に進んでも役立つ診療能力が養われます。 ✓ 大学病院でありながら、<u>虫垂炎、鼠径ヘルニア、腸重積などの Comon Disease</u> や<u>小児救急を経験</u>でき、初期研修で求められるプライマリケア能力や初期対応能力をしっかりと修得できます。 ✓ NICU、小児科、麻酔科、救命救急センターなど多職種・多診療科と連携しながら診療を行うため、チーム医療やコミュニケーション能力を実践的に学べます。 ✓ 小児外科では、手術だけでなく、家族への説明や長期フォローアップも重要です。「患者さん本人」と「家族」の両方に寄り添う経験を通して、医師としての人間的成長につながります。 ✓ 少人数体制のため、研修医が実際に診療や処置に参加できる機会が多く、指導医から丁寧なフィードバックを受けながら成長できます。 ✓ 「子どもの命を支える」という大きなやりがいを実感できる診療科です。将来小児科系だけでなく、外科系・救急・総合診療などを志望する方にとっても貴重な経験になります。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	✓ 小児患者の診察、バイタルサイン評価、<u>輸液・栄養管理</u>、疼痛管理などの基本を身につけます。 ✓ <u>急性腹症</u>や<u>小児救急</u>に対して、初期評価、鑑別診断、必要な検査、適切な対処を行う力を養います。 ✓ 創処置、縫合、ドレーン管理、術後管理など、3 年目以降の診療につながる基本手技を習得します。 ✓ 子どもの成長発達を踏まえた診療と、保護者への説明・意思決定支援を経験します。 ✓ 症例ごとの振り返りを通じて、病態を理解し、診療方針を自分の言葉で説明できることを目指します。

研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット等	✓ 小児外科では、子どもと家族の未来を支える医療のやりがいを実感できます。100年続く生理機能を考えて手術を行っています。 ✓ 大学病院でありながら、虫垂炎や鼠径ヘルニアなどの <u>Common Disease</u> も経験でき、初期研修で必要なプライマリケア能力を伸ばせます。 ✓ さらに、<u>数万出生に1人という希少疾患の患児も集まってきて、高度医療にも触れられるため、一般診療の先にある専門医療まで見通した学びが得られます。</u> ✓ 少人数で距離の近い指導体制のもと、研修医の経験や希望に応じて丁寧にサポートします。 ✓ 小児診療に少しでも興味がある方、外科的な考え方を身につけたい方を歓迎します。
---	---

旭川医科大学
外科学講座
小児外科

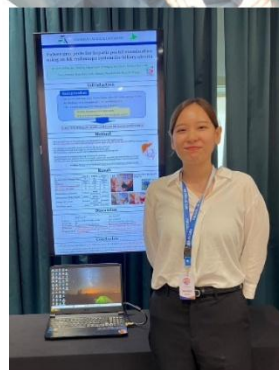


臨床研修

<手術>



<全国学会発表>



<海外国際学会発表>



<救急処置>

《 呼吸器外科 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	当科は肺癌を中心として転移性肺腫瘍、肺嚢胞性疾患（気胸含）、胸腺腫や胚細胞性腫瘍などの縦郭腫瘍、悪性中皮腫などの胸膜疾患、骨、軟部腫瘍などの胸壁腫瘍と広く呼吸器外科領域を網羅している。手術アプローチは、開胸から、VATS（Video-Assisted Thoracoscopic Surgery）、RATS（Robot-Assisted Thoracoscopic Surgery）まで、手術内容も、切除のみならず、気管支形成や肺動脈形成、胸壁再建術などの拡大手術も症例に応じた術式を選択している。 研修医は、その手術症例の担当医の一人として積極的に、日常診療から手術、術後管理に参加し、呼吸器外科としての基本を身につける。また、診療科内の症例検討会に積極的に出席し、可能であればプレゼンテーションも行っていただく。
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	目標（学ぶこと） 1. 画像診断、生検の病理診断などの術前診断、休止が必要な薬剤の管理 2. 術式（なぜその手術、そのアプローチが必要であるのか）について学ぶ 3. 術野の展開法、止血操作、結紮、縫合について実践的に学ぶ 4. 解剖学的な位置に基づく血管や気管支の処理の方法について 5. 術後管理における、全身状態、胸腔ドレーン管理の見方とその対処 6. 退院までの、全身、呼吸状態に関するリハビリテーションについて 研修を通じて得られる経験や技術 1. 結紮法の取得 2. 胸腔穿刺（ドレーン挿入も含む）法の取得 3. 低肺機能症例における呼吸リハビリテーション
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	呼吸器全般の手術症例を担当している。VTAS,RATS などのアプローチの低侵襲化に目が行きがちであるが、大学では、一般市中病院にはない稀有な症例や、進行症例に対する気管支形成、胸壁再建などの拡大手術にも対応している。 また、呼吸器内科は診断能力や悪性腫瘍に対する薬物療法、PDT（Photodynamic Therapy）などの内視鏡的治療にも積極的に行っており、ICI（Immune Checkpoint Inhibitor）を使用した術前薬物療法後の手術も増加している。内科外科の科の垣根なく相談して治療を進めて行くことも魅力の一つとして挙げる。



《 乳腺外科 》

研修の概要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	乳癌は現在、9－10 人に 1 人が生涯発症するとされている女性のがん罹患率 1 位の疾患である。当科は年間 250 例程度の新患例を扱っており、手術、薬物療法を行っている。特に進行再発乳癌に対する薬物療法が進化、複雑化している現在、各種症例の Biomarker や遺伝子状態を確認しながら的確な使用薬剤を決定していく過程を体験できる。また、HBOC(Hereditary Breast and Ovarian Cancer)に対しても遺伝カウンセリング室や各診療科と協力した診療体制が十分に整っている。 研修医は、症例の担当医の一人として積極的に、日常診療から手術、術後管理に参加し、乳腺外科としての基本を身につける。また、診療科内の症例検討会に積極的に出席し、可能であればプレゼンテーションも行っていたいく。
研修目標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	目標（学ぶこと）、研修を通して得られる経験や技術 1. 問診において、しこりや腋窩リンパ節の状態や家族歴について詳細に記録できる 2. 術前診断としての画像診断（MMG、超音波、CT、MRI 等）の読影ができる 3. 針生検（CNB（core needle biopsy）,VAB(Vacuum Assisted Biopsy)方法 4. 病理診断における Biomarker の違いによる治療方針（NAC 含めて）の計画 5. 術式（なぜその手術、そのアプローチが必要であるのか）について学ぶ 6. センチネルリンパ節生検の検出方法、その評価について、周術期管理 7. 術後の病理診断による補助療法を計画する 8. 進行再発乳癌の治療法と具体的な薬物療法について,ICI（Immune Checkpoint Inhibitor）、ADC(Antibody-Drug Conjugate) の作用機序、適応、効果について 9. HBOC の関与遺伝子、変異陽性例に対する治療、サーベランスに関して 10. 遺伝性腫瘍診療で重要な、問診から詳細な家系図をかけるようになる 11. 緩和ケアが必要な場合や、APC、終末期医療について学ぶ 12. Breast Awareness について、その必要性と現状について
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	乳腺外科は予防、疫学、画像を中心とした診断から、組織診断やその Biomarker に基づく治療計画、手術、薬物療法治療の実際、進行再発治療における薬物選択、緩和ケア受診のタイミング、終末期治療計画などすべてを網羅しており、乳癌から紐解く、がん診療の現況を知ることが出来る。 その中で、各種遺伝子発現も含めた Biomarker をベースとした治療計画、進行再発例に対する ICI、ADC を始めとした最新の薬物療法、遺伝子パネル検査の結果に基づく治療などは市中病院では制限もあり、それを知ることが、大学研修の大きなメリットと考える。



《 救急科 》

研修の概要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	1) 3 カ月を基本単位として研修を行う。 2) 頻度の高い救急疾患のプライマリケア・心肺蘇生を通じての呼吸循環管理・集中治療管理を要する重篤な疾患の管理・治療の習得を目標とする。 3) 研修期間を通して、夜間救急外来研修を担当する。
研修目標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1) バックバルブマスク換気・末梢静脈路確保・動脈路確保の習得 2) 緊急時の輸液ルートの確保・気道確保・循環動態の維持・ショックに対する対応の修得 3) 重症患者の輸液管理及び栄養管理の修得 4) 循環器・呼吸器・消化器・中枢神経系疾患の解剖と病態生理の理解 5) 酸塩基平衡・電解質輸液・輸血・栄養管理の基礎理論の理解 6) 体外循環による血液浄化・補助循環の理解 7) 短時間での患者の病歴・現症・検査所見の正しい把握と適切な記録方法及びプレゼンテーション方法の修得 8) ガイドラインに基づく、BLS・ACLS 及び外傷初期診療の修得 9) CT・MRI・超音波検査などの救急画像診断法の修得
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	1) 重症救急症例や複雑な病態を持つ患者の診療経験ができる 心停止後症候群、ショック、多発外傷、重症敗血症、重症呼吸不全、重症中毒などの高度救急診療や、悪性腫瘍、免疫抑制薬、移植後、膠原病、希少疾患、複数併存疾患を持つ患者など、診断・治療方針の判断が難しい症例を経験できる 2) 専門診療科との連携を学びやすい 多くの専門科と協働しながら救急診療を行う経験が得られる 3) 適切なコンサルテーション能力を身につけやすい どの診療科に、どのタイミングで、何を目的に相談するかを実践的に学べる 4) 高度医療への橋渡しや集中治療との連続性を学べる 救急初療から、緊急手術、IVR、内視鏡治療、心血管カテーテル治療、集中治療へつなぐ流れを理解し、ICU/HCU での全身管理、人工呼吸管理、循環管理、血液浄化療法などを継続的に学べる 5) 多職種によるチーム医療を経験できる 救急医、専門医、看護師、薬剤師、臨床工学技士、放射線技師、リハビリ職、MSW などと協働する経験から他職種コミュニケーションについて学べる 6) チーム医療の中での自分の役割を学べる 重症患者診療において、研修医として何を評価し、何を報告し、どのようにチームに貢献するかを学べる。 7) 教育体制が整っており体系的なフィードバックを受けやすい 各専門医・指導医からの指導に加え、カンファレンス、症例検討会、抄読会などに参加し、救急医学を理論的に学び、研修到達度を確認しやすい。 8) 地域医療を支えるスキルについて系統的に学べる 消防機関・他医療機関との連携、災害医療、ドクターカー、ドクターヘリによる病院前救急など多岐にわたる地域医療体制について学べる

《 麻酔科蘇生科 ／ ペインクリニック科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	✓ 臨床麻酔を通じて、各種の気道確保法、呼吸循環管理、人工呼吸法、および各種の鎮静・鎮痛薬などの臨床薬理など、プライマリーケアに必須の手技、理論が学習できます。 ✓ 3ヶ月が基本単位ですが、到達目標などにより1～3ヶ月も可能です。 ✓ 各研修医は、麻酔科専門医や麻酔科指導医とともに診察、治療にあたります。 ✓ 全身麻酔、脊髄くも膜下麻酔、硬膜外麻酔、末梢神経ブロックなどを使用する、各外科系診療科の手術麻酔全般を経験できます。 ✓ ペインクリニック領域に興味のある方は、ペインクリニック外来の見学や区域麻酔の積極的な見学が可能です。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	研修終了時には、周術期患者の全身状態を適切に評価し、安全な医療を提供するための基本的知識と技術を習得することを目標とします。 【習得できる知識・技術】 ・全身状態の評価とリスクアセスメント ・バイタルサインの変化を的確に判断する能力 ・気道管理および気管挿管技術 ・人工呼吸器の基本的な取り扱い ・輸液管理、循環管理の基本 ・急変時の初期対応および心肺蘇生 ・患者および他職種とのコミュニケーション能力 研修を通じて、将来どの診療科に進んでも必要となる全身管理能力と危機対応能力を身につけることができます。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	✓ 麻酔科研修の最大の魅力は、「患者さんの全身を診る力」を集中的に学べることです。 ✓ 気管挿管、末梢・中心静脈路確保、観血的動脈圧ライン確保、脊髄くも膜下麻酔などの手技を、落ち着いた環境で安全に習得できることも大きな魅力です。 ✓ 呼吸、循環、意識状態などをリアルタイムで評価しながら診療を行うため、臨床医としての基礎力が大きく向上します。 ✓ 大学病院では、新生児～高齢者や多くの合併症を有する重症患者、希少疾患患者など幅広い症例を経験することができます。 ✓ また、外科系・内科系を問わず多くの診療科と連携するため、多角的な視点から患者を評価する力が身につきます。 ✓ 麻酔科研修で得られる気道管理、呼吸・循環管理、急変対応の知識と技術は、救急医療、内科、外科、小児科をはじめ、あらゆる診療科で将来確実に役立つ重要なスキルです。 私たちは、単に麻酔技術を学ぶだけでなく、「安全な医療を支える医師」として成長できる研修を目指しています。将来の進路に関わらず、医師としての基礎力を身につけたい皆さんを歓迎します。



《 緩和ケア科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	＜緩和ケア科の特徴＞ ➤ 北海道内でも数少ない日本緩和医療学会専門医による指導、専門医研修施設 ➤ 初期研修で緩和ケアを選択できる貴重な環境 ➤ がんに加え、心不全・呼吸不全・神経難病・慢性疼痛など幅広い症例を経験 ➤ 多職種チームで「患者さんの苦痛を減らす医療」を学べる ＜主な研修内容＞ ➤ 緩和ケアチームカンファレンスへの参加 ➤ 症状評価（疼痛、呼吸困難、不安、不眠、せん妄など） ➤ オピオイドを含む薬物調整 ➤ 患者さん・家族とのコミュニケーション ➤ 退院支援、在宅療養調整 ➤ 多職種連携（看護師、薬剤師、MSW、リハビリ等） ＜担当患者＞ 1 日 5～10 名程度を担当し、指導医とともに診療を行います。 ＜経験できる症例＞ ➤ さまざまな原発のがん患者さんの疼痛緩和 ➤ 化学療法中の症状緩和 ➤ 終末期症状マネジメント ➤ 非がん疾患の緩和ケア ➤ 在宅移行支援
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	＜到達目標＞ ➤ 患者さんの「苦痛」に気づき、適切に評価できる ➤ がん疼痛に対する基本的な薬物治療を実践できる ➤ オピオイドの副作用対応を理解できる ➤ 化学療法、放射線治療に伴う苦痛軽減のための対応を理解できる ➤ 患者さんの価値観を踏まえたコミュニケーションができる ➤ 多職種と協力して療養支援ができる ＜研修で身につく力＞ ➤ オピオイド処方・調整スキル ➤ 症状緩和の基本的アプローチ→基本的緩和ケア ➤ ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の考え方 ➤ がん疼痛マネジメントとがん治療の統合 ➤ どの診療科でも役立つ患者対応能力
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	緩和ケアは、特定の診療科だけに必要な医療ではありません。がん診療はもちろん、救急、内科、外科、在宅医療など、あらゆる場面で「患者さんの苦痛を和らげる力」が求められます。 当科では、 ➤ 医療用麻薬の実践的な使い方 ➤ 難しい症状への対応 ➤ 患者さん・家族との対話、意思決定支援 ➤ 在宅療養支援 を、実際の症例を通して集中的に学ぶことができます。 大学病院だからこそ、高度医療を受けながら苦痛を抱える患者さんや、多診療科で治療中の複雑な症例、がん以外の疾患の緩和ケアを経験することも大きな魅力です。 「患者さんを全人的に診る力」をぜひ初期研修のうちに学んでください。



《 小児科・思春期科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	小児科・思春期科は、常に患者である子ども全体を把握することが求められる診療科です。卒後臨床研修では、「疾患を診る」のではなく、「患者とその家族を診る」という全人的な観察姿勢と、プライマリ・ケアにもつながる小児診療の基本を学びます。当科には、感染・免疫・腎、内分泌・糖尿病、循環器、神経、血液・腫瘍、新生児の6つの専門診療グループがあります。研修医は診療チームの一員として、指導医とともに日々の診療に参加し、病歴聴取、身体診察、検査方針、治療方針、家族への説明について学びます。 研修では、病棟診療、総合外来、専門外来、1か月健診、予防接種外来、心臓カテーテル検査、NICU、総回診、各種カンファレンスなど、小児科診療の幅広い場面に触れることができます。また、旭川厚生病院、名寄市立病院などの研修協力病院とも連携しながら、旭川医科大学小児科の理念に基づいた小児科研修を行います。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	小児科研修では、成長と発達という小児の特性を踏まえて病歴を聴取し、身体所見を取り、鑑別診断と治療方針を考える力を身につけることを目標とします。また、子どもの身体だけでなく心理社会的背景や家族の状況にも配慮し、保護者へ適切に説明しながら、必要に応じて専門医や多職種と連携する姿勢を学びます。 研修を通じて、感染症、アレルギー・免疫疾患、腎疾患、内分泌・糖尿病、循環器疾患、神経疾患、血液・腫瘍疾患、新生児疾患など、各領域の基本的な診かたを学びます。症状や検査所見から病態を考え、重症度・緊急度を判断し、適切な初期対応や専門診療への橋渡しができることを目指します。新生児領域では、出生後の生理的適応、新生児診察、異常の判断、新生児蘇生、NICUでの全身管理、母乳育児支援を通じて、新生児と家族を支える医療の基本を学びます。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	大学病院での研修の大きな特徴は、一般診療の先にある専門領域の診療を幅広く経験できることです。小児のプライマリケアやコモンディジーズの経験は、初期研修においてももちろん重要ですが、専門領域の診療を知ることが、その後の小児一般診療をより適切に実践するための重要な知識と経験になります。 日常診療で遭遇する症状や健康上の問題のなかには、専門的評価や治療を必要とする疾患が隠れていることがあります。大学病院での研修を通して、注意すべき所見や経過、専門医へつなぐタイミング、紹介後の診療内容を学ぶことは、その後の小児一般診療に大きく役立ちます。専門診療の現場を知ること、症例の見極め、保護者への説明、専門医との連携、紹介後・退院後を見通した診療を、より自信を持って行えるようになります。 また、大学病院では各専門領域の標準的治療や先進的医療、そして、その背景にある研究や医学の進歩にも触れることができます。専門医の病態理解、治療方針、家族説明、さらに未解明の臨床疑問への研究姿勢を間近で学ぶことは、小児医療の本質的な考え方や子ども・家族との向き合い方を理解する貴重な機会になります。そして、これらを指導する専門医の人数、教育体制が整っている事も大きな特徴と言えます。 小児科・思春期科では、「疾患を診る」のではなく、「子どもと家族を診る」姿勢を大切にしています。大学病院での研修で得られる経験は、小児科に進むかどうかに関わらず、将来どの診療科に進んでも大きな財産になります。大学病院ならではの高い専門性を通して、小児医療をより深く理解したい研修医を歓迎します。



《 産婦人科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	当講座は、周産母子科（産科）と女性医学科（婦人科）の2グループあり、4週間の研修のうち、2週間ずつ各グループを研修してもらいます。両グループとも、主な研修内容は病棟業務であり、入院患者のカルテ記載や、処方・注射薬・検査のオーダーを行ってもらいます。産婦人科グループの一員として、積極的に診療に参加してください。 ＜周産母子科＞主な経験疾患：切迫早産、妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病など。 希望に応じて、練習後に実際の妊婦に胎児超音波検査を行ってもらいます。 ＜女性医学科＞主な経験疾患：子宮筋腫、子宮腺筋症、月経困難症、子宮内膜症、婦人科悪性腫瘍など 手術日には、希望に応じて適宜助手として参加し、結紮・縫合などの手術手技を行ってもらいます。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	＜周産母子科＞ 到達目標：妊産褥婦ならびに新生児の医療に必要な基本的知識を研修する。 初期研修医には、病棟の入院患者を全員受け持ってもらい、診療情報を把握してもらいます。分娩や帝王切開にも助手として入ってもらいます。周産期分野の common disease である、切迫早産や妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病を経験し、妊産婦・褥婦への投薬や初期対応について研修してもらいます。 ＜女性医学科＞ 到達目標：女性特有の病気を持つ患者の診療に関する臨床能力を身につける。 初期研修医には、病棟の入院患者を全員受け持ってもらい、診療情報を把握してもらいます。希望に応じて、手術の助手として参加してもらいます。入院中の患者から、女性特有の疾患（良性腫瘍・悪性腫瘍）に対してどのような投薬や手術が行われているのかについて研修してもらいます。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	大学病院は、市中病院に比べて、ハイリスク症例が多く、common disease が少ないため、研修の魅力が少ないと思われるかもしれませんが。産婦人科においては、集約化の流れにより、大学病院には common disease からハイリスク疾患まで、様々な症例が集まります。大学の症例は、産婦人科疾患のみならず、他科の疾患も合併していることが多く、様々な診療科との連携が必要となります。そのため、将来産婦人科医にならなくても、妊婦や産婦人科疾患に関わる機会は少なくありません。産婦人科研修は必修であり、大学病院で研修することで、自分の入局する診療科がどのように産婦人科に関わっているかを研修できるのは、大学病院の研修ならではの魅力です。 また、大学病院はすべての診療科が揃っているのが魅力でもあります。市中・地域病院では診療科の一部がないことも多く、それに関する疾患は経験することができません。私たち産婦人科医としても、すべての診療科が揃っているということは、診療の上で非常に心強く、自分の科だけで診療が成り立つことは少ないと感じています。旭川医科大学病院は、どの診療科の先生も親切に対応してくれるため、合併症があっても相談しやすい環境が整っていると思います。 最後に、大学病院では最新の知見やエビデンスに基づいた診療をしています。大学で研修することで、若手のうちからエビデンスを意識した診療を研修できることは、今後の医師人生に大きく影響を与えるのではないかと考えます。ぜひ、旭川医科大学病院で一緒に働きましょう！



《 精神科神経科 》

研修の概要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	精神科神経科では、こころの不調だけでなく、脳・神経のはたらきや身体疾患との関連も含めて、患者さんを総合的に理解する力を養います。外来・病棟での診療を通して、うつ病、双極性障害、不安障害、統合失調症、認知症、せん妄、睡眠障害、器質性精神障害など、日常診療で遭遇する幅広い症例を経験します。 初期研修医の皆さんには、2～4名程度の患者さんを担当していただきます。もちろん単独で主治医として診療を担うのではなく、主治医や指導医のもとで診療に参加する体制です。当科は比較的小規模な医局であることもあり、担当の枠を超えて病棟患者さんの状態を日常的に共有しており、主治医・指導医以外にも相談しやすい環境があります。 また、他科から依頼があった際には、上級医とともに他科往診（精神科リエゾン）を経験していただきます。これも研修医が単独で対応することではなく、必ず上級医の指導のもとで行います。さらに4週間を通して精神科の各領域を一通り学ぶクルーズを設けており、精神科志望の方はもちろん、他科を志望する方にとっても、日常診療のさまざまな場面で役立つ知識と視点を身につけることができます。
研修目標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的な研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	本研修では精神症状を有する患者さんに対して落ち着いて評価を行い、適切な初期対応と治療方針の検討ができることを目標とします。具体的には、患者さんやご家族から必要な情報を引き出す面接技法、精神療法や精神症候学の基本、主要な精神疾患の特徴の理解、薬物療法の基本的な考え方、せん妄や自殺リスクを含む緊急性の判断などを学びます。さらに、精神科医療では、診断や処方だけでなく、患者さんとの信頼関係の構築、チーム医療、地域との連携が重要です。研修を通して、医師としてのコミュニケーション能力、多面的に病態を捉える視点、そして「患者さんを全人的に診る力」を養います。精神科を志望する方はもちろん、内科、救急、総合診療、小児科など幅広い分野を目指す方にとっても、臨床の土台となる重要な経験が得られます。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	精神科は主に症状が「心」「気分」「ふるまい」等として現れる疾患を取り扱います。症状自体は目に見えやすい一方で、その背景にある病因や病態は身体疾患の場合と違い目に見えないものばかりです。なかには、疾患の本質がなお十分には解明されていないものや、疾患概念そのものが現在も検討され続けているものもあります。 それでも、症状は実際に存在するわけで、苦しみ、助けを求めて受診される患者さんは数多くいらっしゃいます。だからこそ精神科医は、患者さんの言葉に耳を傾け、検査データだけでは捉えきれないつらさや背景を、対話と観察を通して丁寧に理解していきます。表情や態度、生活歴、家族背景などを総合的に把握し、精神医学の視点から整理・理解したうえで、患者さんを支える方法を患者さん自身とともに考えていくことが、精神科診療の本質のひとつです。精神医学は、かつて十分に理解されていなかった心の病を、観察し、分類し、対話し、治療する学問として長い歴史の中で発展してきました。近年では脳科学や薬物療法の進歩に加え、心理社会的支援や地域連携の重要性もより明確になり、精神科医療は「こころ」「脳」「社会」を総合的にみる医療へと広がっています。こうした精神医学の奥深さと醍醐味を、日々の診療のなかで実感できることが、精神科研修の大きな魅力です。

当科は大学病院でありながら比較的 common disease も幅広く診療しています。その上で、大学病院ならではの、他院で対応に難渋した症例やより専門的な症例や治療、たとえば治療抵抗性統合失調症、rTMS 療法、ポリソムノグラフィー検査、アルツハイマー病に対する疾患修飾薬などにも触れることができます。精神科を志望する方はもちろん、将来どの診療科に進むとしても、医師としての土台となる「人を理解する力」を深められる研修です。



《 整形外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	整形外科は人体最大、最重量である筋骨格系の組織を対象としています。全身の退行性変化による慢性疾患や外傷などの急性疾患、小児における先天性疾患や骨軟部腫瘍など多くの疾患を扱い、性別や年齢を問わず、幅広い知識が要求されます。また有訴者率では、腰痛、肩こり、手足の関節の症状が1位から3位を占めるなど、整形外科疾患を抱える患者は大変多く、これらを正しく診療できない医師は、風邪を診ることができない医師と同じとも考えられます。 1-3ヶ月の短期研修の場合は大学病院での研修が主となりますが、診療グループの一員として慢性疾患の診断や治療に携わります。外傷に特化した研修を希望する場合は関連病院で研修します。この場合、整形外科のみならず救急医療における技術修得も同時に研鑽することも可能で、その点では有意義と考えます。大学では股関節、脊椎、上肢、下肢、腫瘍の5グループがありますが、プログラムの選択はあくまでも研修医の希望を尊重し、ローテーションすることになります。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	到達目標は、1) 比較的扱うことが多い退行性疾患の診断や治療と、(2) 急性期疾患（主に外傷）の初期治療、を行えることとする。詳細については研修プログラムを参照してください。 BLS/Advance 実習では外来・手術見学やギブス実習での練習のみでしたが、初期研修では実際に患者の問診、診察を行い、外傷患者の初期治療や手術の助手に入ってもらいます。特に外来、病棟の研修では、初診から診断、治療、その後の快復過程を診ることができるのは大変勉強になるとともに、患者が再び動けるようになる、痛みなく生活ができるようになる、という経験は、その後の医師人生においても大変貴重なものになると考えます。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	整形外科は、骨・関節・脊椎・神経・筋肉を対象に、「動くこと」を支える診療科です。終末期がん患者においても、「最後まで自分で歩きたい」「痛みなく過ごしたい」という希望は非常に多く、動けることや痛みのない生活は、時に生命そのものと同じくらい大切な意味を持ちます。 また、「動ける」ということは、単に歩行できるというだけではありません。若年者では通学・就職・結婚・出産、高齢者では自立した生活や健康寿命の維持など、人生そのものに大きく関わります。手取り足取り、患者と前に進む作業は、AIにはまだまだ置き換えられないことと思います。整形外科は、患者の命だけでなく、「生活そのもの」を支える科であると言えます。 旭川医科大学は、道北地域における最後の拠点病院としての役割を担っています。そのため整形外科講座には、幅広い疾患に対応する「generalist」と、高度専門医療を担う「professional」の両方の側面があります。 大学病院によっては、特定分野に特化しているため common disease を十分経験できず、専門性の高い症例に限られる施設もあります。そうすると初期研修の時期には積極的に診療に関わることができないことがあります。一方、旭川医大では、外傷や変性疾患などの日常診療から、専門性の高い症例や難治症例まで、幅広い整形外科診療を経験することができます。本学では、整形外科の基礎と専門性の両方を学べる環境が整っています。 おまけ：整形外科のある「8階西病棟」は、院内で一番明るい病棟という噂があります。理由は来ていただいたらお話しします。



《 皮膚科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	・旭川医科大学皮膚科は、道東・道北地域の皮膚科診療の最後の砦として、悪性腫瘍からアトピー性皮膚炎、さらには壊死性筋膜炎などの救急疾患まで、あらゆる皮膚・粘膜に関係する疾患を取り扱います。 ・初期研修では、選択研修として2週間～10ヶ月まで研修することが可能です。3ヶ月以内の短期研修では、興味のある部分や、将来進む診療科にとって有益な範囲（例：プライマリーな一般皮膚科診療・皮膚外科・皮膚病理診断）を優先して研修できるよう、可能な限りの配慮をします。長期選択者には、皮膚科専攻医1-2年目と同様の研修に入ってもらい、皮膚科のプロフェッショナルリズムを実践していただきます。 ・当科では、朝の勉強会・総回診・皮膚病理演習・近着症例検討など、専攻医を対象にした教育を重視している、全国でも数少ない大学病院です。通年で系統的に、皮膚科専門医に匹敵するレベルの知識とノウハウを会得することが可能です。研修期間中に一部参加するだけでも、皮膚科の本当の世界を感じることができるでしょう。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	（短期研修における目標） ・基本的な皮膚疾患の概略を説明することができる ・ステロイドを含む主な外用剤を適切に選択し、外用指導することができる ・KOH法による真菌検査を正しく実施・評価できる ・抜糸・包帯法・圧迫療法・凍結療法・局所麻酔を実践することができる ・表皮縫合およびパンチ生検を行うことができる（研修期間1ヶ月以上） （長期研修における目標） ・基本的な皮膚疾患の概略と治療を実践することができる ・典型的な皮膚疾患の病理像を読み、診断することができる ・基本的な皮膚外科治療（表皮嚢腫摘出など）を行うことができる ・真皮縫合・マットレス縫合・伝達麻酔法を実践することができる ・主な皮膚疾患を英語で理解し、PubMedなどで最新の知見にアクセスできる
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	・皮膚科は「自分の目で見て」「自分の能力や審美眼をもとに」「一瞬で」診断から治療までを組み立てることを特徴とする診療科です。 ・皮膚科医には、全身治療を含めた内科的側面・腫瘍摘出などの外科的側面・正しい診断を導き出す<u>病理的側面</u>を兼ね備えることが求められます。手技のバリエーションは多く、工夫を実践することも可能です。色々な手技を会得したい人には、うってつけの診療科です。 ・そして皮膚科医は、あらゆる年代の患者さんに対して、生活に最も密着した臓器である皮膚の健康を守るエキスパートです。さらに、自分の<u>審美眼</u>が保たれている限りは、未永く第一線で活躍することが可能な診療科です。 ・皮膚科は、自分の<u>プライベート</u>を保つことが比較的容易な診療科です。医局が果たすべき地域医療の役割とのバランスになりますが、とくに旭川医大皮膚科では、趣味や他分野の精通、妊娠出産子育て介護などのライフイベントを尊重します。 ・大学病院研修では、多数の指導医による多角的な視点の醸成が可能です。皮膚科診断は、いかに多くの鑑別診断（可能性）を考えて対処するかが実力に比例します。珍しくも重要な疾患を含めて深く学べるのは、大学病院研修の大きな特長です。 ・大学病院研修では、過去の膨大な臨床・病理データに基づく基本的研修や、臨床研究の土台が存在します。単なるプライマリー診療の枠を超えた研修が可能です。 ・研修の初期に良質で系統的な研修を受けることは、長い医師人生を考えた時にpricelessな価値をもたらします。奥深い皮膚科の世界を一緒に楽しみましょう！



《 腎泌尿器外科 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	旭川医科大学病院 腎泌尿器外科では、泌尿器科専門診療のみならず、高齢患者診療や救急対応を含めた「全身を診る力」を重視した研修を行っています。 尿路感染症、尿閉、尿管結石、血尿などの common disease を数多く経験でき、カテーテル留置や膀胱洗浄など基本手技も習得可能です。研修医は指導医とともに病棟・外来・手術・救急診療に参加し、周術期管理や多職種連携について学びます。 また、前立腺癌、膀胱癌、腎癌などの高度専門医療やロボット支援手術にも触れることができ、将来どの診療科に進んでも役立つ診療能力を身につけられることが特徴です。 日程調整のうえ地方会や国内学会への参加も行っており、学術的な視点に触れる機会もあります。
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	泌尿器科診療に必要な基本的知識・技能を修得するとともに、将来どの診療科に進んでも役立つ「全身を診る力」を身につけることを目標としています。特に、尿路感染症、尿閉、血尿、尿管結石などの common disease や救急疾患に対して、適切な初期対応と診療方針の立案ができることを目指します。また、高齢患者が多い診療科であることから、フレイル、多疾患併存、認知機能低下を有する患者への対応や、多職種と連携した医療についても学びます。 研修では、指導医とともに病棟患者を担当し、診察、カルテ記載、プレゼンテーション、検査・治療方針の立案を経験します。さらに、尿道カテーテル留置、膀胱洗浄、超音波検査などの基本手技を実践しながら修得します。手術では内視鏡手術やロボット支援手術の助手として参加し、周術期管理や解剖学的理解を深めます。救急外来では、敗血症や急性腎障害を伴う症例にも関わることで、全身管理能力を養います。 また、カンファレンスや抄読会を通じて、臨床推論やエビデンスに基づく診療について学びます。日程調整のうえ学会参加も行っており、学術的視点やプレゼンテーション能力を身につける機会もあります。
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	泌尿器科は、「内科的視点」と「外科的視点」の両方を学ぶことができる診療科です。画像診断や全身管理を行いながら、内視鏡手術やロボット支援手術など外科的治療にも関わるため、幅広い臨床能力を身につけることができます。また、腎機能、感染症、悪性腫瘍、高齢者医療など多くの分野と関わることから、他科との連携を学びやすいことも特徴です。 大学病院での研修の魅力は、一般的な疾患から高度専門医療まで、幅広い症例を一つの施設で経験できる点にあります。診断や治療に難渋する症例、多職種や他科との連携が必要な症例も多く、単に手技を学ぶだけでなく、「なぜその診療を行うのか」を深く考える習慣が身につきます。また、各分野の専門医が身近にいるため、多角的な視点でフィードバックを受けながら診療を学べる環境があります。 当科では、研修医が質問や相談をしやすい雰囲気大切にしており、一人ひとりの経験や習熟度に応じて丁寧に指導を行っています。将来泌尿器科を志望する方はもちろん、どの分野に進む場合でも役立つ臨床力を身につけられる研修を目指しています。



《 眼科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	旭川医科大学眼科では、一般眼科診療から高度専門医療まで幅広い症例を経験でき、短期間の研修では、外来診療、病棟管理、手術見学・助手を通じて眼科診療の基本的な流れを習得する。 眼科医を目指し長期間の研修を希望する場合には、指導医のもとで外来診療に参加し、診察手技、検査手技、診断および治療方針の立案を実践的に学ぶ。また、白内障、緑内障、網膜硝子体手術など多様な手術に助手として参加し、ウェットラボでのトレーニングを通じて手術手技を習得する。 当科では、糖尿病網膜症、黄斑疾患、ぶどう膜炎、緑内障、角結膜疾患、斜視弱視、眼形成など幅広い専門分野を有しており、各分野の専門医から直接指導を受けることができる。さらに、症例カンファレンス、抄読会、研究ミーティングを通じて臨床力と研究的思考を養い、将来の眼科専門医として必要な知識・技能・態度を身につけることを目標とする。 また、臨床能力の向上のみならず、研究活動や学会発表への参加も積極的に支援しており、各人の将来像に応じた研修を行う。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	臨床における到達目標：眼科領域における各種疾患および外傷に適切に対応できるよう基本的な診察能力を身に付ける。得られた情報を整理・統合し、診断に必要な検査計画を立て、その結果を解釈し、患者の病態を総合的に捕らえ、最良の治療方針を立て、十分なインフォームドコンセントを得て実行できることを目標とする。さらに眼科手術の基本を修得することを目標とする。 ＜行動目標 1＞ 眼・視覚系疾患について鑑別診断・初期治療に必要な検査・処置に対する知識・手技を習得し、疾患の把握に必要な所見を得ることができる。基本的手技の適応を決定し、実施するために以下の検査・処置を習得する ・視力検査 ・屈折検査 ・眼位・眼球運動検査 ・眼圧検査 ・視野検査 ・眼底検査 ・点眼手技・眼軟膏点入手技 ・創処置（洗眼・眼帯） ＜行動目標 2＞ 日常遭遇しうる眼疾患の鑑別診断・初期治療を的確に行うことができる。そのために以下の経験すべき疾患・病態を挙げる。 ・屈折異常と調節異常（近視・遠視・乱視・老視） ・眼位・眼球運動の異常 ・眼瞼・涙器の障害 ・角結膜炎 角結膜の障害 ・白内障 ・緑内障 ・糖尿病性眼底変化 高血圧・動脈硬化性眼底変化 ・黄斑部疾患

	<行動目標 3> 眼科領域の緊急を要する症状・病態を理解し救急治療を的確に行うことができる。そのために以下の経験すべき疾患・病態を挙げる。 ・ 急性緑内障発作 ・ 角結膜異物飛入 ・ 眼球打撲・眼外傷 ・ 角結膜化学熱傷 ・ 一過性黒内障を含む急性の視力障害
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット等	教育理念：卒後初期研修では眼科医としての基礎を確立するとともに、各研修医が目標とする眼科医像へ邁進するための基本を身に付けることを教育の基本理念としている。さらに、研修医の夢が実現できるように教育、チャンスを供与し、手術ができる眼科外科医の育成、各分野でのスペシャリストの養成、海外留学の機会を与えインターナショナルな眼科医の育成を教育方針としている。

《 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	新生児から高齢者まで、良性疾患から悪性疾患まで、様々な患者の診断、治療に携わることができるのが耳鼻咽喉科・頭頸部外科の魅力の1つである。 2年間の初期臨床研修の選択期間において、原則として2年目に1～11カ月の期間をとり、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の一般臨床の基礎を修得する。研修オリエンテーション以降の個々のプログラムは、各人の希望を尊重しつつ当科の責任において柔軟に運用される。 当科の研修により経験が期待できる腫瘍な疾患・症例は以下の通りである。 ① 頻度の高い症状：頸部リンパ節腫脹、めまい、聴覚障害、鼻出血、嘔声、呼吸困難、咳・痰、嚥下困難 ② 緊急を要する病態：窒息に至る可能性のある気道緊急、外傷、誤飲・誤嚥 ③ 経験が求められる疾患・病態：骨折（顔面外傷）、甲状腺疾患（甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症、甲状腺腫瘍）、中耳炎、急性・慢性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎、扁桃の急性・慢性炎症性疾患、異物（外耳道・鼻腔・咽頭・喉頭・食道）、ウイルス感染症、細菌感染症
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1) 研修の最終目標は、基本的な診察手技を修得し、必要な検査計画を立案し、結果を正しく判断し、患者の病態を把握したうえで治療方針を策定、患者および家族から十分なインフォームドコンセントを得て治療を施行することである。 2) 修得を目指す耳鼻咽喉科領域検査法：耳鏡、鼻鏡、喉頭鏡所見、聴覚検査、平衡機能検査、顔面神経検査、嗅覚検査、鼻アレルギー検査、鼻腔通気度検査、味覚検査、扁桃病巣感染症の検査、内視鏡検査、音声機能検査、耳鼻咽喉科領域の画像診断を実施することができる。 3) 上記の診療行為はすべて指導医・専攻医とともにチームとして行い、いつでも助言が得られる研修環境を提供している。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	耳鼻咽喉科は感覚器のエキスパートです。 診断から治療まで、新生児から高齢者まで、内科系の仕事から外科系の仕事まで、様々な分野に携わることができます。また、耳鼻咽喉科・頭頸部外科を専攻後に自分の興味のある分野をサブスペシャリティとして選択可能です。 大学病院での研修のメリットは何といっても豊富な症例数です。地域の病院では治療できない進行期頭頸部悪性腫瘍から、common diseases まで経験可能です。大学病院では専門医取得に必須である論文執筆のサポートも充実しています。有名な英文雑誌に掲載歴のある医師が多数在籍しており、日本語論文執筆のみならず、英文論文執筆に関してもかゆいところ手が届く指導ができます。 さらに、当科は研究にも力を入れており、大学院生の実際の研究状況や、その後の留学の状況等も目の当たりにできることが大学病院以外との大きな差異の1つです。2026年5月時点でも米国に1名、欧州に1名当科から留学中の医師がいます。 大学病院での研修終了後は、豊富にある関連病院から地域の病院等を選択し、後期専攻医として勤務可能です。専門医取得後は大学病院での臨床、基礎研究、関連病院での勤務、開業など様々な選択肢を提供できるのも当科の魅力です。

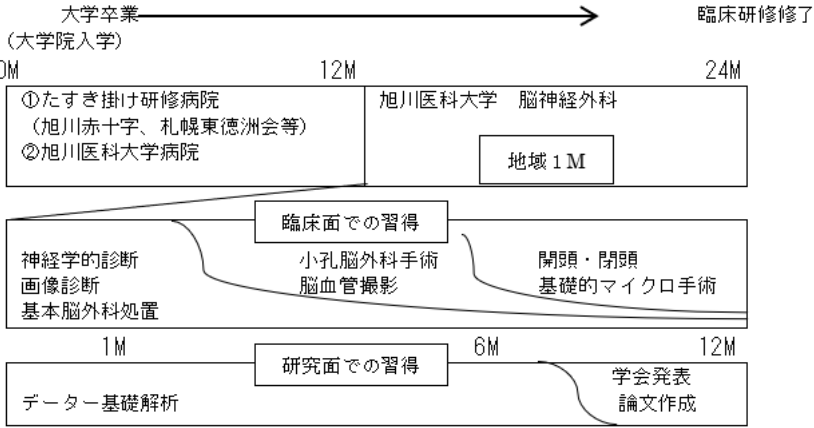


《 放射線科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	放射線科では、画像診断、核医学、放射線治療の3領域を中心に、放射線医学全般を幅広く学ぶことができます。画像診断部門では、X線、CT、MRI、超音波、血管造影など多様なモダリティを用いた読影を経験し、各検査の原理や適応、画像所見の理解を深めます。また、IVR（画像下治療）を通して、低侵襲治療の実際についても学ぶことができます。核医学部門では、PETやシンチグラフィによる機能画像診断に加え、近年急速に発展している核医学治療についても経験することで、診断と治療を一体として学べる点は大きな特徴です。放射線治療部門では、外部照射や小線源治療、治療計画作成などを経験し、がん診療における放射線治療の役割を理解します。 研修は原則8週間で、各分野の専門医による指導のもと、幅広い疾患を経験しながら、診断から治療まで一貫した放射線医学を学べる体制となっています。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	本研修では、放射線医学が医療全体の中で果たす役割を理解し、臨床現場で必要となる画像診断能力と放射線医学的思考力を身につけることを目標としています。画像診断領域では、各種画像検査の原理や適応、造影剤の使用法や副作用対応を理解し、中枢神経、頭頸部、胸部、消化器、泌尿器、骨関節、乳腺など幅広い領域の主要疾患について読影力を養います。また、IVRの適応や基本的手技についても学びます。核医学領域では、PETやシンチグラム所見を通じて機能画像診断を理解し、核医学治療についての知識を深めます。さらに放射線治療領域では、悪性腫瘍の病期診断、治療計画、正常組織障害や有害事象について学び、がん診療における放射線治療の役割を理解します。 これらの研修を通して、画像所見を単に読むだけではなく、患者の病態や臨床情報を踏まえて総合的に考える力を養い、各診療科と連携しながら患者診療を支える実践的な能力の習得を目指します。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	放射線科の最大の魅力は、特定の臓器に限定されず、全身のさまざまな疾患に関わることができる点にあります。画像診断では、救急疾患から慢性疾患、悪性腫瘍まで幅広い症例を経験し、画像を通して病態を総合的に理解する力を養います。また、単に画像を読むだけではなく、臨床情報や検査データを踏まえて診断を組み立てることで、論理的思考力や臨床推論力を高めることができます。読影力や画像解剖の知識は、将来どの診療科に進む場合にも大きな強みとなります。 さらに、放射線科では画像診断だけでなく、IVR（画像下治療）、核医学、放射線治療まで幅広い分野を経験できることも特徴です。IVRでは低侵襲治療を学び、放射線治療や核医学治療では患者さんと継続的に関わりながら診療を行うため、診断だけでなく治療に携わる放射線科医としての役割も実感できます。 放射線科は、患者さんと直接接する機会が少ないイメージを持たれることもありますが、実際には画像診断を通して多くの診療科を支え、診療方針の決定に深く関わる「医療の要」となる診療科です。さらに、IVRや放射線治療、核医学治療などの治療領域では、患者さんと継続的に関わりながら診療を行い、治療効果や副作用の評価、患者さんやご家族への説明などを通して、臨床医としての経験を積むことができます。画像から病態を読み解き、診断だけでなく治療にも貢献できる点は、放射線科ならではの大きな魅力です。 幅広い視野で医学を学びたい方や、診断から治療まで総合的に患者さんに関わりたい方にとって、非常に学びの多い研修環境です。将来放射線科を志望する方はもちろん、どの診療科を目指す場合でも、画像診断力や臨床推論力を高める貴重な経験を積むことができます。



《 脳神経外科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	以下の3つのコースにより研修内容が異なる ① たすき掛けコース 1 年次研修病院、2 年次より旭川医大病院脳神経外科（地域医療 1 か月あり） ② 自由選択コース 1 年次旭川医大病院ローテーション、2 年次より脳神経外科（地域医療 1 か月あり） ③ 必修選択外科コース 2 週間から 10 週間で脳神経外科をローテーション
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	選択するコースに研修期間の差があるため目標が異なる ①② たすき掛けコース及び自由選択コース 一般臨床研修を終えたのちに、臨床、研究の両側面より脳神経外科医、脳科学者としての基礎をトレーニングするコースである。  ③ 必修選択外科コース 基礎的な脳疾患の臨床診断、画像診断、基礎脳外科手技・処置を習得するコースである。その内容はローテーション期間に応じて考慮する。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	

《 臨床検査・輸血部 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	基本研修体制 1. すべての医師に必要な臨床検査医学に関する幅広い診療知識と技能修得を中心的な目的とする。 2. 研修医は病院臨床検査・輸血部において臨床研修を行う。 臨床検査・輸血部の各部門を回ることにより、臨床検査・輸血検査の各種手技を実際に学ぶ。種々の検査法の基本原理を知り、生理的変動や検査値に変動を及ぼす影響因子を学び、疾患の診断、治療、経過観察と臨床検査値との関連性を知り、結果を正しく解釈できるようになる。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	基幹一般目標 1. 臨床検査医学に関する幅広い知識を基盤に、適切な検査計画を立て、得られた検査成績を総合的に評価し、患者の診断・病態解析ができるようになる。 2. 各種臨床検査に関して臨床医のコンサルタントとしての基本を学ぶ。 3. 精度管理の実際と意義を理解する。 4. 臨床検査医学の実践を通じて、予防医学・健康管理の分野で貢献できる。 5. 臨床検査医学の分野での研究能力を育成する。 6. 検査部ならびに臨床検査に関連した部署の適切な管理・運営の基本を身につける。 7. 輸血検査、血液製剤の適正使用を理解・実践する能力を身につける。 これらの基幹一般目標の下に、1) 臨床検査医学総論、2) 一般検査、3) 臨床血液学、4) 臨床化学、5) 臨床微生物学、6) 臨床免疫血清学、7) 輸血検査、8) 生理機能検査、9) 超音波検査、10) 遺伝子検査の基本的手技の修得を目標とした研修項目を置く。検査法に関しては、具体的・現実的な一般目標と行動目標に沿って研修し、さらに reversed CPC などへの参加を通じて臨床医学における意義を学ぶ。 生理機能検査では、心臓や血管の超音波法の基本的読影について指導医の指導を受け、基本的心血管疾患を説明できるようになる。 R-CPC では代表的な疾患の診断、治療、経過観察と臨床検査値との関連性を学び、臨床検査の醍醐味を体験する。

《 病理部 》

研 修 の 概 要 ・ 診療科の特徴 ・ 基本研修体制 ・ 研修内容の骨子 ・ 経験する主要な疾患・症例 等	1) 病理基礎研修 1 ヶ月と、病理専門研修（関連病院病理部研修を含む） 1 ヶ月～10 ヶ月のいずれか、もしくは双方を履修可能。 2) 病理診断科は、患者から検体を取得するあらゆる臨床科が依頼する「病理診断」を担当する専門部署であると同時に、臨床と基礎の橋渡しを行うトランスレーショナルな部署として高次の医療を支えている。 3) 病理基礎研修では、病理診断の重要性を臨床サイドから認識していただき、ゲノム医療時代の医療に欠かせない分子遺伝学的診断センスを涵養する。 4) 病理専門研修では、病理組織診断ならびに病理解剖を実際に担当する。 5) ローテーションプログラムは、各人の希望を尊重し、該当各科・関連病院との協議のもとに研修センターを調整の核として作成され、柔軟に運用される。 6) 病理組織診断に関しては担当病理医が指導にあたる。細胞診・標本作製・特殊検査等に関しては担当技師および担当病理医が指導にあたる。
研 修 目 標 ・ 研修の到達目標 ・ 目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1) 一般的な臨床医のクライアントは患者であるが、病理医は患者と接する機会が少なく、代わりに臨床医をクライアントとする business to business (B to B) 的、もしくはコンサルタント的な職務である。臨床医との円滑な情報交換を行う技術を修得し、臨床サイドから病理サイドに要求する内容を正しく理解する。 2) 病理診断を行うために必要な形態診断の知識ならびに手技を修得する。その過程を通じて、人体病理に対する幅広い学問を修得し、疾患の診断、治療方針の決定や予後の判定に関わる情報を弁別できるようになると共に、発症メカニズムの理解や新たな治療法の開発に関するアイディア・センスを育む。 3) 具体的目標 3-1. 病理所見のとらえ方（肉眼的所見、組織学的所見）の修得。 3-2. 術中迅速診断法（遠隔病理画像診断を含む）の修得。 3-3. 細胞診診断法の修得。 3-4. 病理解剖の実践。 3-5. 症例および研究成果の学会報告と論文の発表。
研修の魅力・メッセージ ・ 診療科の魅力 ・ 診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	臨床全科と関わりのある本学病理部での研修は、大学病院ならではの幅と深さを兼ね備えている（文字通り、脳から足の先まであらゆる疾病の病理診断に携わることができる）。 病理診断学を修得することは、臨床と研究の両立を求められるアカデミックキャリアにおいて大きなアドバンテージとなる（※学位取得、研究費獲得、ラボの運営などあらゆる場面で病理学は極めて有効なツールとして機能する）。かつ、病理組織形態学は臨床における数々の clinical question を解決する礎にもなり、将来は臨床だけやっていきたいと考える者にとっても応用可能性が高い。一例報告やケースシリーズ、後ろ向き臨床研究などの経験を積む上でも病理部との連携は必須であると言える。病理に何らかのかたちでコミットしたことがあるかどうかは 10 年後、20 年後に大きな差となって医師の人生を左右する。 初期研修で手技や処置を一刻も早く身に着けたいと感じるのは当然であるし、理解はできる。しかし、そもそも、手先の器用さではなく、「高い知性と熱意」によって医師免許を手にしたはずの皆さんが、キャリアの序盤に高度の学術に触れることなく手技の実践にのみ時間を使うとするならば、それは端的にもったいないと感じる。臨床各科と横断的に関わることができる病理部に、充実したスタッフから若い専攻医までが複数揃っている本学病理部は、全国有数の研修環境を提供できる。



※2026年の病理学会にて。全スタッフが出席・発表した。

《 総合診療部 》

研修の概要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	当院を受診する自身で希望受診科がなく、紹介状がない初診患者の診療にあたり、指導医とマンツーマンの指導を受け多くの初期診療を経験する。 外来では特に医療面接の充実を重要視し、身体診察と簡単な検査から診断を行う 基本的診療能力の向上を目指す。 また、指導医に適切にプレゼンテーション出来るようにすることも繰り返し行う。研修で経験した症候について速やかにレポートを作成する指導を行い、可能であれば研修医発表会での症例発表も行う。
研修目標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1) 必要な医療面接ができる。 2) 適切な身体診察ができ、その意義を理解する。 3) 鑑別診断を行い、検査計画を立て、それをプレゼンテーションできる。 4) 初診患者と良好なコミュニケーションがとれ、解釈モデルに応じた患者への説明ができる。 5) 必要な検査のオーダーと結果の解釈ができる。 6) 必要な処方や輸液指示が出せる。 7) コメディカルと協調して業務にあたれる。 8) 必要な Evidence が取得できる。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	当科はベッドを持たない診療科です。外来診療を通して、他科と連携しながら、患者さんの問題解決にあたる様々な方法・手段を学修することが出来ます。特に、多臓器を横断する様々な問題を抱える症例の病態生理・診断方法を、大学病院のたくさんの専門科と協力しながら、学修することができます。 大学病院と言うことで、市中の医療施設と比べていわゆるプライマリ・ケアの症例を経験することは多くありません。しかしながら、プライマリ・ケアの診療能力を高めるには、単にそのような症例をたくさん診療することで得られるものではありません。感冒や高血圧症を多数経験して診断・治療を行っても、その診療に強くなれるわけではないのです。むしろ大学病院での特殊な症例を、一例一例丹念に、ロジック・エビデンスに基づいたステップを踏んで適切に診断するというプロセスを経験して、その能力を身につけることが極めて重要です。そしてこの能力は、プライマリ・ケアの診療能力のみならず、全ての臨床医に対して求められる資質と言えます。当科の研修は、その意味を理解するきっかけになると思います。

《 リハビリテーション科 》

研 修 の 概 要 ・診療科の特徴 ・基本研修体制 ・研修内容の骨子 ・経験する主要な疾患・症例 等	リハビリテーション科の特徴 当科は患者の QOL(Quality of Life)改善を目標に、さまざまな医学的手段（投薬、ブロック注射、PT、OT、ST、BCI など）を用いて患者の治療に当たります。その対象疾患は多岐にわたり、すべての疾患が対象と言っても過言ではありません。新生児から超高齢者までの全年齢層に対応するとともに、四肢麻痺のような重度の麻痺患者からスポーツ復帰を目指すレベルの身体能力を持つ患者まで幅広く対応します。また、障害者スポーツへの関与も行っております。運動機能障害のみならず、高次脳機能障害や小児の発達障害、嚥下障害、排泄障害などにも対応しており、幅広い視点から患者の QOL 改善に向けたアプローチを行います。さらに、義肢・装具や家屋改造などにも関わり、医療と福祉の橋渡しも当科の特徴の一つです。
研 修 目 標 ・研修の到達目標 ・目標達成に向けた具体的研修内容および研修を通じて得られる経験や技術 等	1) 基本的には運動機能障害をもつ患者が対象となりますが、高次脳機能障害、嚥下障害、発達障害も対象に含まれており、全年齢層のあらゆる疾患に対し、患者の立場に立ってリハビリテーション医療を行える医師になることを目標とします。 2) リハビリテーション医療はチーム医療であり、看護師、PT、OT、ST、義肢装具士、MSW、薬剤師、栄養士、放射線技師など多くのメディカルスタッフと協同して仕事を行う必要があります。チーム医療の要として活躍できる医師の養成を目指します。 3) 患者の診断・評価・治療のために必要な筋電図検査や嚥下造影検査、神経ブロックおよびボツリヌス療法の技術を獲得できます。 4) 各障害に対する具体的な PT、OT、ST の手法および筋電電動義手やコンピュータ制御の膝継手を使用した特殊な義肢装具療法も学ぶことができます。 5) 超高齢社会に必要な介護や福祉との関わりを学び、患者が安心して生活を維持できるよう、生活期に医療が行う役割を学ぶことが可能です。
研修の魅力・メッセージ ・診療科の魅力 ・診療科から見た大学病院研修の魅力やメリット 等	学生時代に超高齢社会の現状を学んだことと思います。すでに日本の医療は転換期を迎えており、高齢者に如何に対応するかが重要課題となっています。高齢の患者が抱える病気は一つではなく、複数の疾患による複数の症状を呈しています。あらゆる視点から患者を診て、その人が幸せな暮らしを送ることができるように、さまざまな医学的手段を用いて導いていくのがリハビリテーション科の医師の仕事です。 リハビリテーション治療の多くは患者の機能改善のために運動負荷を与えます。疾患を持った方に運動負荷を与えるためには、その安全を確保する必要があります。この身体の安全確保こそがリハビリテーション科医の最大の役目となります。運動時の意識レベル、血圧、脈拍、血糖、呼吸、疼痛の管理のみならず、運動を行うための食事（栄養）の管理、嚥下能力のチェック、睡眠の確保、排泄のコントロール、モチベーションの維持など、その人全体をみることができて初めてリハビリテーション医療が遂行できるのです。 人間をみる医療の最たる分野がリハビリテーション医療です。リハビリテーション医療の教育ができる場所は限られています。旭川医科大学病院リハビリテーション科で人をみる医療を学んでみませんか。 多くの優秀なセラピストと一緒に仕事をしてみませんか。



医師臨床研修プログラムの特修科目別マトリックス表

必修分野		I 到達目標																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
選択必修分野		▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽

必修分野	
選択必修分野	
○：特に十分な研修が可能な分野 ○：研修が可能な分野	
オリエンテーション等	形成外科
循環器内科	放射線科（治療）
腎臓内科	放射線科（診断）
呼吸器内科	放射線科（核医学）
脳神経内科	女性医学科
糖尿病・内分泌内科	周産母子科
リウマチ・膠原病内科	耳鼻咽喉頭頸部外科
消化器内科	眼科
血液・腫瘍内科	腎泌尿器外科
小児科・思春期科	皮膚科
精神科神経科	整形外科
精液・腫瘍内科	消化管外科
血管外科	肝胆脾・移植外科
心臓外科	小児外科
新生児科	乳腺外科
小児科・思春期科	呼吸器外科
精神科神経科	
血液・腫瘍内科	
消化器内科	
リウマチ・膠原病内科	
糖尿病・内分泌内科	
脳神経内科	
呼吸器内科	
腎臓内科	
循環器内科	
オリエントテーション等	

③ 2) 全研修期間 研修が構築される項目	
81 i 児童・思春期精神科領域	
82 ii 薬剤耐性菌	
83 iii ゲノム医療	
84 iv 診療領域・職権横断的なチームの活動	
継続すべき症状（26疾患）	
85 1 ショック	
86 2 体重減少・いらいら	
87 3 発疹	
88 4 黄疸	
89 5 発熱	
90 6 もの忘れ	
91 7 頭痛	
92 8 めまい	
93 9 意識障害・失神	
94 10 いけいれん発作	
95 11 視力障害	
96 12 聴覚	
97 13 心停止	
98 14 呼吸困難	
99 15 吐血・咯血	
100 16 下血・血便	
101 17 嘔気・嘔吐	
102 18 腹痛	
103 19 排便異常（下痢・便秘）	
104 20 熱傷・外傷	
105 21 瘧・骨節痛	
106 22 関節痛	
107 23 運動麻痺・筋力低下	
108 24 排尿障害（尿失禁・排尿困難）	
109 25 興奮・せん妄	
110 26 仰うつ	
111 27 成長・発達	
112 28 妊娠・出産	
113 29 終末期の症候	
継続すべき症状・病態（26疾病・病態）	
114 1 脳血管障害	
115 2 認知症	
116 3 急性冠症候群	
117 4 心不全	
118 5 大動脈瘤	
119 6 高血圧	
120 7 肺結核	
121 8 肺炎	
122 9 急性上気道炎	
123 10 気管支喘息	
124 11 慢性閉塞性肺疾患（COPD）	
125 12 急性膵炎	

[illegible]



旭川医科大学病院 卒後臨床研修センター

〒078-8510

北海道旭川市緑が丘東 2 条 1 丁目 1 番 1 号

TEL 0166-68-2198 (直通)

<https://www.asahikawa-med.ac.jp/bureau/shomu/sotsugo/>

